

平安京左京五条二坊四町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京五条二坊四町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

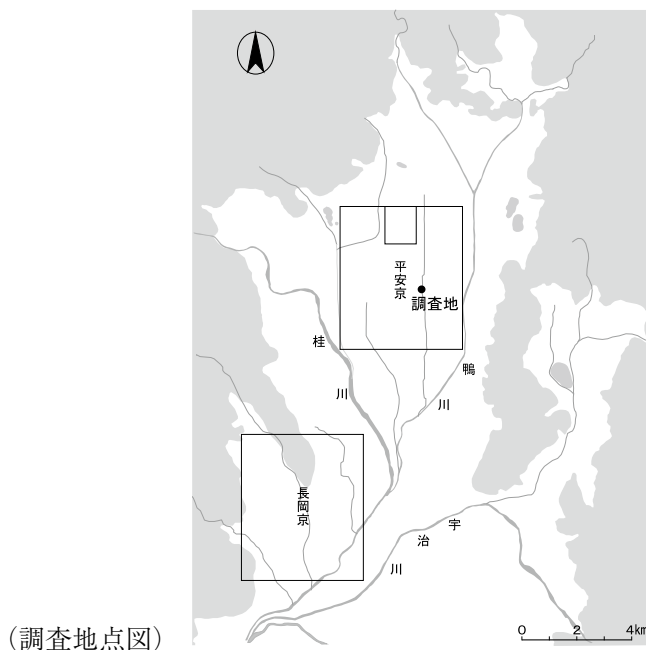
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成26年1月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（文化財保護課番号 12 H 552）
- 2 調査所在地 京都市下京区高辻通猪熊西入十文字町665番 他
- 3 委 託 者 古代友禅株式会社 代表取締役社長 近藤哲生
- 4 調査期間 2013年6月24日～2013年9月13日
- 5 調査面積 555㎡
- 6 調査担当者 辻 裕司・伊藤 潔
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」・「島原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 辻 裕司・伊藤 潔
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 第3面の遺構	5
(3) 第2面の遺構	9
(4) 第1面の遺構	11
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 平安時代の土器類	14
(3) 鎌倉時代の土器類	18
(4) 室町時代の土器類	21
(5) 出土軒瓦	23
5. ま と め	25

図 版 目 次

図版1	遺構	調査区断面図 (1 : 150)
図版2	遺構	第3面平面図 (1 : 150)
図版3	遺構	第2面平面図 (1 : 150)
図版4	遺構	第1面平面図 (1 : 150)
図版5	遺構	1 第3面 調査区全景 (北から) 2 第3面 調査区北東部近景 (北から) 3 第3面 溝185・178 (北から)
図版6	遺構	1 第3面 井戸107 (西から) 2 第3面 井戸144 (東から) 3 第3面 井戸109 (北から) 4 第3面 柱穴74 (北西から)
図版7	遺構	1 第2面 調査区全景 (北から) 2 第2面 調査区北東部近景 (北から) 3 第2面 溝206 (南西から)

- 図版8 遺構 1 第2面 井戸57（北から）
 2 第2面 土坑97断面（北西から）
 3 第2面 土坑97遺物出土状況（北から）
- 図版9 遺構 1 第1面 調査区全景（北から）
 2 第1面 井戸36（北から）
 3 第1面 柱穴63（北東から）
- 図版10 遺構 1 第1面 土坑61（西から）
 2 第1面 土坑25（南から）
 3 第1面 土坑5遺物出土状況（北から）
 4 第1面 土坑48上面（北から）
- 図版11 遺物 1 整地層、他遺構出土土器
 2 土坑124・176、溝175出土土器
- 図版12 遺物 柱穴184・74、井戸107・101・57、土坑117出土土器
- 図版13 遺物 溝206・111、土坑67・62・97出土土器
- 図版14 遺物 土坑61・25・48・5、井戸36、柱穴63出土土器
- 図版15 遺物 土坑5出土土器、各遺構出土軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景	2
図3	作業風景	2
図4	調査区配置図（1：500）	3
図5	調査地点および既往調査地点位置図（1：2,500）	4
図6	溝185・178断面図（1：50）	6
図7	井戸101・107・144・109実測図（1：80）	7
図8	柱穴74実測図（1：40）	9
図9	溝206・111平面図（1：50）	9
図10	井戸57実測図（1：80）	10
図11	土坑97実測図（1：50）	10
図12	土坑62実測図（1：50）	11
図13	井戸36実測図（1：80）	12
図14	土坑61・25・5・48実測図（1：80）	12
図15	柱穴63実測図（1：50）	13

図16	平安時代遺物実測図（1：4）	15
図17	鎌倉時代遺物実測図1（1：4）	19
図18	鎌倉時代遺物実測図2（1：4）	20
図19	室町時代遺物実測図1（1：4）	21
図20	室町時代遺物実測図2（1：4）	22
図21	出土軒瓦拓影・実測図（1：3）	24

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	14
表3	土坑97出土土器器形分類表	26

平安京左京五条二坊四町跡

1. 調査経過

本調査は、マンション建築に伴う発掘調査である。調査地点は、京都市下京区高辻通猪熊西入十文字町665番 他に所在する。調査対象地北側には高辻通が東西方向に、東側には猪熊通が南北方向に通る。当該地にマンション建築が計画されたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）により対象地内で試掘調査が行われた。調査の結果、平安時代から中世に至る遺構が検出されたため、発掘調査が実施されることとなった。発掘調査は、文化財保護課の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013年10月1日から公益財団法人に移行。）が実施した。調査対象地の現況は、更地ではほぼ平坦であった。

当該地は、平安京左京五条二坊四町にあたる。『拾芥抄』本文によれば、平安時代には、五条二坊三～六町の四町を占める天皇退位後の居所である「後院」が存在したといわれている。鎌倉時代の『百練抄』や『続史愚抄』などの文献史料によれば、五条二坊三・四町には後嵯峨上皇の御所である五条大宮殿が営まれた。また、後深草・亀山天皇が移御され、仮皇居ともなっていたが、文永7年（1270）には火災により焼失した。その後の様子は明らかではないが、寛永14年（1637）の『洛中絵図』には、「十字丁（町）」と記されている。



図1 調査位置図（1：2,500）



図2 調査前全景



図3 作業風景

したがって、今回の調査では、上記当該期遺構の検出ならびに遺跡の変遷を明らかにすることを主目的とする。

今回の調査地点は、四町跡の北東部に該当し、北側には高辻小路が東西に、東側には猪熊小路が南北に通る。当該地周辺では、これまで埋蔵文化財の発掘調査件数は極めて少ないが、立会調査によって、各地点で遺物包含層や遺構などが検出されている。調査地点に北接した高辻通の南側歩道で行われた立会調査では、平安時代前期（9世紀後半）の高辻小路北側溝が検出されている。したがって、今回の調査区内には、高辻小路南築地が東西方向に通ることが想定できる。猪熊小路は、現在の猪熊通の東側に位置していたと想定されており、今回の調査区内では、関連遺構は検出できない。

調査は、平成25年6月24日から開始した。まず、調査対象地内に指導を受けた調査区画を設定し、文化財保護課の臨検を受けた。その後、重機による掘削を進めた。測量基準点を設置し、人力による調査も進めた。機械掘削後の調査区内の状況は、既存建物基礎などの撤去により調査区内ほぼ全域にわたり攪乱を受け、遺構の遺存状況は悪い。

調査は、先述した文献史料ならびに試掘調査成果を基に、平安時代・鎌倉時代・室町時代以降の3時期・3面に分けて実施した。第1面は室町時代以降の時期で、第1層上面に相当する。しかし、第1層は調査区内では調査区南部のごく一部に遺存していたに過ぎない。第2面は鎌倉時代で、第1層除去後の第2層上面で検出した遺構のうち、重複状況や堆積土層などから判断し対象とした。第3面は平安時代で、第2層上面に相当する。第2層も概して調査区内の一部に遺存していたに過ぎない。したがって、第3面を含め第1面および第2面相当遺構についても、地山上面で検出したものもある。

調査の進捗に従い、検出遺構については、平面実測・断面実測などで記録した。写真撮影については、調査区全景の撮影を主とし、主要な遺構については、個別の撮影を行った。各面ごとの調査終了時に、その都度文化財保護課の臨検を受け、その後の調査を進めた。

平成25年9月13日には、全ての調査を終了した。

2. 位置と環境

左京五条二坊跡内の発掘調査事例は、十六町の中央部北端で京都文化博物館により実施された¹⁾1例が報告されているのみで、実施された大半は、試掘・立会調査である。周辺調査位置図(図5)には、二坊三町から六町、一坊十三町・十四町の東半における発掘調査、試掘・立会調査地点の位置を示している。

二坊三町では、調査地点北接する立会調査1で平安時代前期(9世紀後半)の高辻小路北側溝が検出されている。高辻小路北側溝は、五条一坊十四町の立会調査32でも検出されている。その他、立会調査2で平安時代前期および室町時代の遺物包含層が、立会調査3～6では平安時代前期から室町時代の土坑・遺物包含層などが検出され、三町内では、広範にわたって遺構が確認されている。

今回の調査地点が含まれる四町では、調査地点に東接する立会調査7で平安時代中期の遺物包含層、立会調査8で鎌倉時代から室町時代の遺物包含層が検出され、四町内では概して北部で遺構が検出されている。

五町内では、立会調査9で平安時代中期の遺物包含層が、立会調査10で平安時代の土坑と鎌倉時代前期の遺物包含層、立会調査11で平安時代後期と室町時代の遺物包含層と室町時代の土坑、立会調査12で平安時代後期以降の遺物包含層が6面検出された。立会調査13では鎌倉時代から室町時代の遺物包含層と室町時代の土坑、立会・試掘調査14～17では室町時代の遺物包含層が確認されている。このように、五町内でも広範囲にわたり遺構が検出されている。

六町内では、複数の試掘調査による成果が報告されている。試掘調査18では室町時代後期の土坑・井戸・溝、その後の立会調査19でも平安時代後期の土坑・ピット、鎌倉時代の土坑・落込み、平安時代後期から鎌倉時代の遺物包含層が検出された。試掘調査20では鎌倉時代以降の柱穴・土坑・井戸・石列、試掘調査21では室町時代後期の土坑、立会調査22で平安時代後期から室町時代の土坑と平安時代後期から室町時代の遺物包含

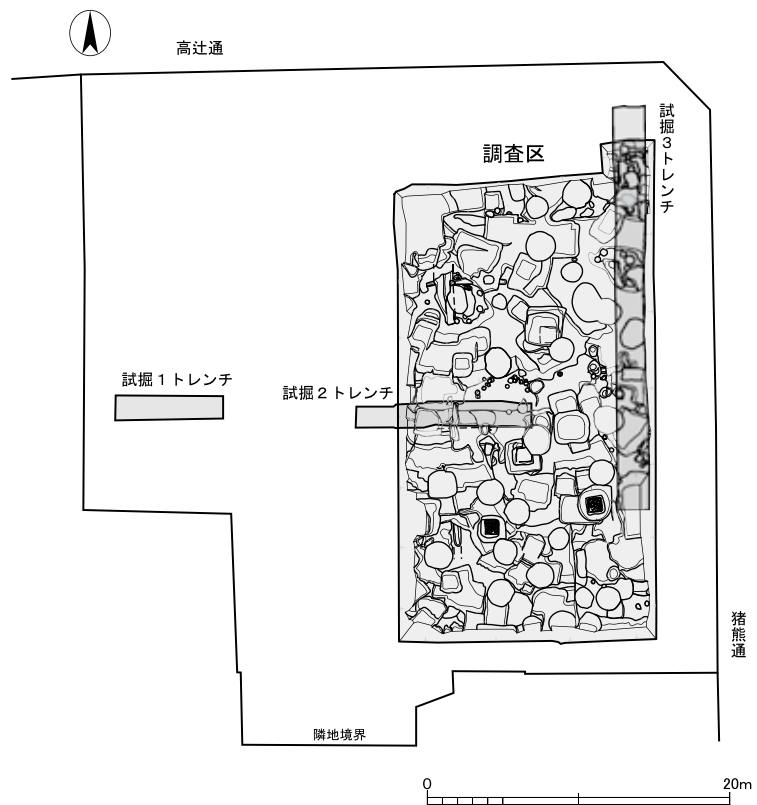


図4 調査区配置図(1:500)

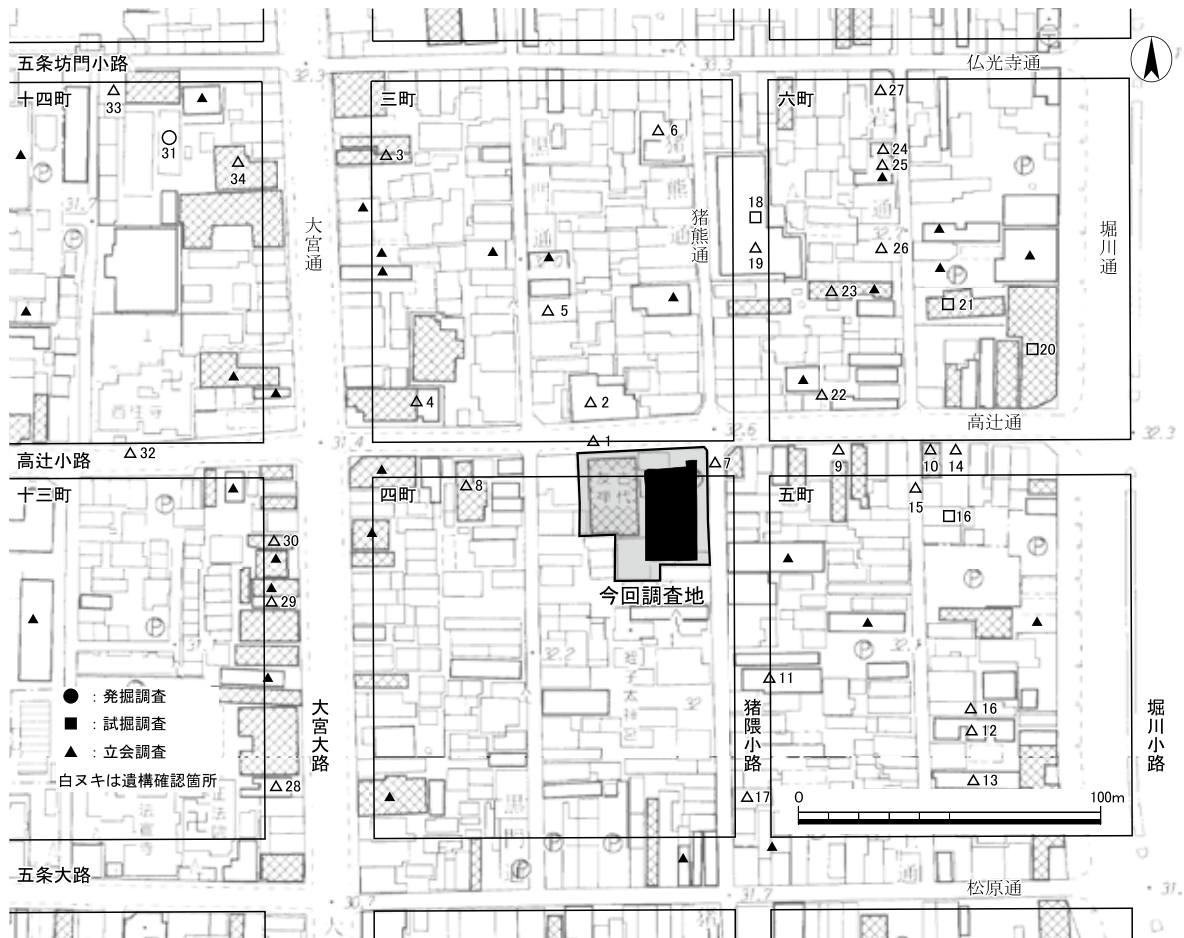


図5 調査地点および既往調査地点位置図 (1 : 2,500)

層、立会調査23では平安時代後期の遺物包含層が、立会調査24・25では平安時代後期の土坑が、立会調査26では鎌倉時代から室町時代の遺物包含層が2層、立会調査27では室町時代の土坑が検出されている。

一方、一坊十三町東半の立会調査28では室町時代の大宮大路西側溝が、立会調査29・30では平安時代後期以降の遺物包含層が検出されている。十四町東半の発掘調査²⁾31では平安時代中期の溝、平安時代後期の井戸、室町時代の土坑などが、立会調査33では平安時代のピットが、立会調査34では室町時代の土坑が検出されている。

このように、試掘・立会調査にもかかわらず、広範囲にわたる遺跡の広がりが確認されており、今回の調査においても、調査成果が期待された。

3. 遺 構

今回の調査で検出した遺構総数は、206基に及ぶ。検出した遺構の時代区分としては、平安時代の遺構は第3面、鎌倉時代の遺構は第2面とし、室町時代以降の遺構は第1面として扱った。

(1) 基本層序 (図版1)

調査区の基本層序を示すと、現代盛土層はもっとも浅い箇所(東壁南部など)で厚さ約0.3m、中世の整地土層と考えられる土層(第1層)は厚さ約0.1m、平安時代の整地土層と考えられる土層(第2層)は厚さ約0.2m堆積し、第2層下は地山となる。地山はシルト層・細砂層・粗砂層・砂礫層などが互層堆積を示し、最上層はシルト層である。

調査区内は攪乱が多数分布し、整地土層が堆積する箇所は極めて狭い。第1層とした整地土層は、大半が削平を受けたと考えられ、調査区南東隅にわずかに遺存していたに過ぎない。第2層とした整地土層は調査区中央部や北東部に点在する。第1層の時期は、堆積箇所もわずかでほとんど遺物が出土していないが、細片遺物から室町時代と考えている。また、第2層については、中央部の土層では上下2層検出しており、出土遺物から下層は平安時代前期、上層は平安時代後期の整地土層と考えている。したがって、原則として、第1面は第1層上面である。第2面に対応する鎌倉時代の整地土層は未検出であり、削平を受けた可能性がある。第3面に対応する土層は第2層である。

検出した遺構には平安時代・鎌倉時代・室町時代のものがある。主要な遺構について概述する。

(2) 第3面の遺構 (図版2・5-1)

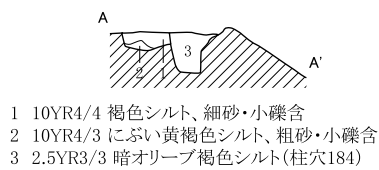
第3面とした遺構面は、整地土層である第2層上面であるが、遺構の大半は地山上面で検出した。各遺構から出土した遺物の時期により、平安時代前期から後期に属する遺構を第3面の遺構としている。当該期の遺構は、調査区のほぼ全域に分布するが、調査区北端では、高辻小路南築地心想定線をを超えて、北側に平安時代前期の遺構が分布しており、高辻小路に関連する遺構は、検出できなかった。

検出した遺構には、溝、井戸、柱穴、土坑などがある。主要な各遺構について次に示す。

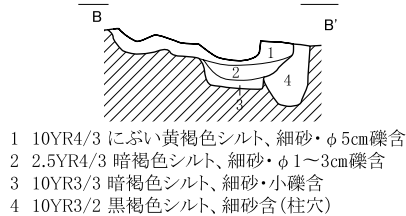
表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝、井戸、土坑、柱穴	
鎌倉時代	高辻小路南側溝、溝、土坑、井戸、柱穴	
室町時代	井戸、土坑、柱穴	

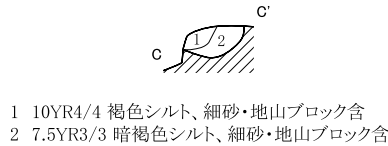
溝185 H=31.80m



溝178 H=31.80m



H=31.50m



※ 断面の位置は図版2参照



図6 溝185・178断面図(1:50)

溝

調査区の西半で3条検出した。条坊や四行八門制による地割りととは関連しない位置にある。

溝185(図6、図版5-3) 調査区北部で検出した東西方向に延びる溝である。溝の東西端は攪乱により失われており、東西方向に約5.2m分検出した。溝の南北心は、高辻小路南築地心想定線から南へ約3.6mに位置する。検出面での規模は、幅約0.4m、深さ0.06~0.1m。土師器・須恵器など平安時代前期の土器類が出土したが、細片で図示できない。

溝175 調査区西部で検出した東西方向の溝である。溝の東西端は攪乱により失われており、東西方向に約6.3m分検出した。溝の南北心は、高辻小路南築地心想定線から南へ約12.6mに位置する。検出面での規模は、幅1.13m、深さ約0.3mある。土師器・須恵器など平安時代前期の土器類が出土したが、細片で図示できない。

溝178(図6、図版5-3) 調査区西半で検出した南北方向の溝である。南北端は攪乱により失われており、断続的に南北方向に約18.2m分検出した。溝の東西心は、猪熊小路西築地心想定線から西へ約23.9mに位置する。底面は東に深い2段落ちを呈する。土師器・須恵器・瓦など平安時代前期の土器類が出土した。

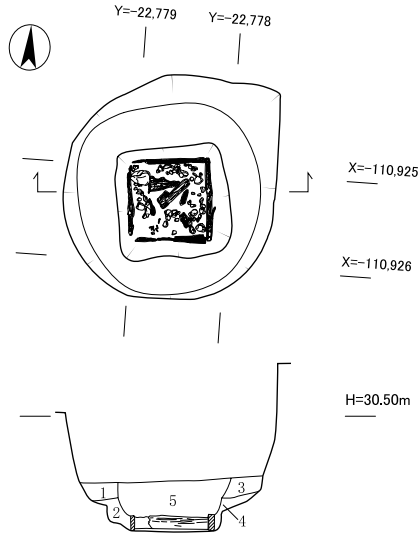
井戸

井戸は4基検出した。多くが後世の遺構や攪乱によって失われている。掘形の深さは比較的深い。地山が砂礫層主体のため木枠の遺存状況は悪い。

井戸101(図7) 調査区南東部で検出した井戸である。掘形は、上半が攪乱により失われており、平面形は歪な円形を呈するが、北東隅は直角を呈しており、本来は方形であろう。検出面での規模は、長軸2.36m、短軸2.23m、深さ1.77mある。掘形の中央底面に平面形が方形を呈する井戸枠を据える。井戸枠は、最下部の横棧が残存するのみで、大半は腐食し遺存していない。横棧は、腐食していたが、井戸枠は一辺約0.9mあり、主軸方向は、北に対し西に約6°振れる。底面には黒褐色泥土層上面に径2~10cm礫をややまばらに敷き詰める。土師器・須恵器・山茶碗など平安時代後期の土器類が出土した。

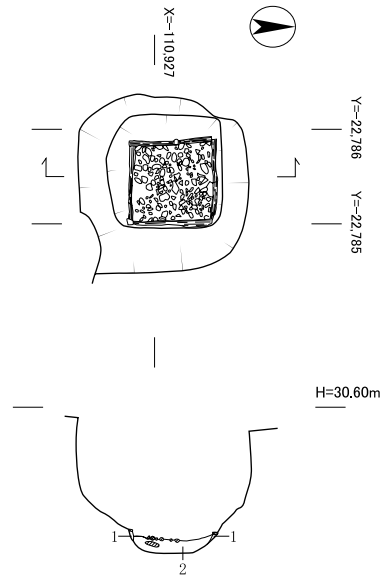
井戸107(図7、図版6-1) 調査区南西部で検出した井戸である。掘形は、上半が攪乱や後世の遺構により失われており、平面形は歪な方形を呈する。検出面での規模は、一辺1.8~1.9m、東端からの深さ約2.4mある。掘形の中央に平面形が方形を呈する井戸枠を据える。井戸枠は、最下部の横棧が残存するのみで、大半は遺存しない。横棧は、腐食していたが、一辺約0.95mあり、

井戸101



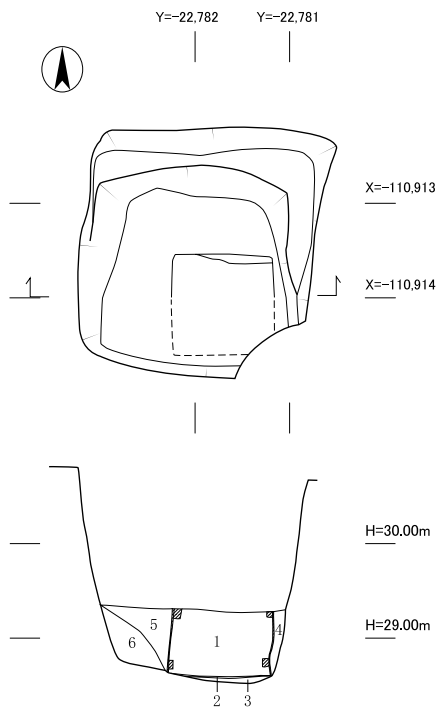
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、細砂・φ1~5cm礫含
- 2 10YR4/4 褐色シルト、細砂・φ1~5cm礫含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、細砂・φ2~5cm礫含
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、細砂多・φ2~5cm礫含
- 5 2.5Y3/1 黒褐色泥土、微砂・φ2~5cm礫わずか・地山ブロック混

井戸107



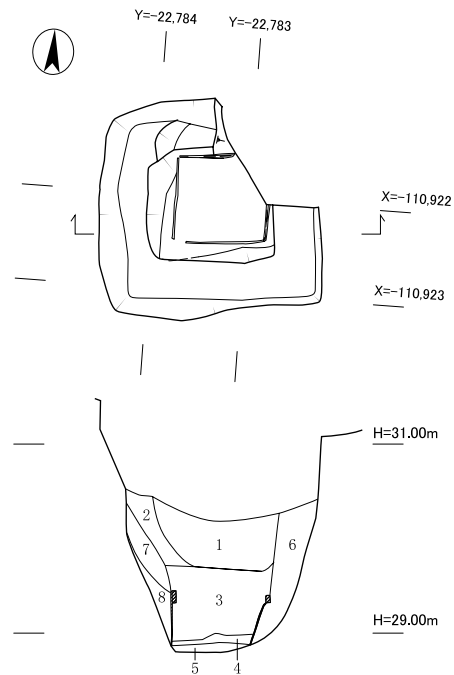
- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト、微砂・φ5cm礫・炭含
- 2 10YR3/1 黒褐色泥土、細砂・φ2~10cm礫多量含

井戸144



- 1 2.5Y3/1 黒褐色シルト、φ1~5cm礫中量・地山ブロック含
- 2 10YR3/1 黒褐色泥土、腐植土
- 3 10YR3/2 黒褐色砂礫、φ2~5cm
- 4 2.5Y3/2 黒褐色シルト、細砂・φ2cm礫含
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト、φ2~5cm礫・地山ブロック含
- 6 2.5Y5/4 黄褐色砂礫、φ5cm・シルト含

井戸109



- 1 10YR3/4 暗褐色シルト、細砂・φ1~4cm礫含
- 2 2.5Y3/1 黒褐色シルト、φ4cm礫・地山ブロック含
- 3 10YR3/2 黒褐色泥土、φ3cm礫含
- 4 2.5Y3/1 黒褐色泥土、腐植土
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫、φ1~10cm礫含
- 6 7.5YR3/3 暗褐色シルト、φ1~4cm礫含
- 7 10YR3/1 黒褐色砂礫、φ2cm礫・シルト含
- 8 10YR2/1 黒褐色砂礫、φ2cm礫・シルトブロック含



図7 井戸101・107・144・109実測図 (1:80)

主軸方向は、ほぼ座標北を示す。底面には黒褐色泥土層上面に径2～10cm礫をまばらに敷き詰める。土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器など平安時代後期の土器類が出土した。

井戸144 (図7、図版6-2) 調査区中央北部で検出した井戸である。掘形は、上半が後世の遺構や攪乱により失われており、平面形は歪な方形を呈する。掘形の主軸方向は、北に対し東へ約4°振れる。検出面での規模は、一辺約2.6m、深さ約2.3mある。掘形の中央に平面形が方形を呈する井戸枠を据える。井戸掘形中位から底面にかけて井戸枠痕跡を検出したが、断面記録後、崩落した。一辺約1.1mあり、主軸方向は、ほぼ北を示す。井戸枠内底面には黒褐色砂礫を敷き、上面には腐植土層である黒褐色泥土層が薄く堆積する。土師器・須恵器・瓦器など平安時代後期の土器類が出土した。

井戸109 (図7、図版6-3) 調査区中央部で検出した井戸である。掘形は、北東部が後世の遺構により失われているが、平面形はほぼ方形を呈する。掘形の主軸方向は、北に対し約6°西に振れる。検出面での規模は、一辺約2.3m、深さ約2.7mある。掘形の中央北寄りには平面形が方形を呈する井戸枠を据える。井戸枠は腐食し、わずかに痕跡が遺存する。井戸枠中位の横棧から、一辺0.95～1.0mある。主軸方向は、北に対し西に約5°振れる。井戸枠内底面には、オリーブ褐色砂礫を敷き、上面には腐植土層である黒褐色泥土層が堆積する。上部は、検出面から約1.0mまで掘形の土層に沿って井戸枠痕跡が連続しており、開口された状態で徐々に埋没したと考えられる。土師器・須恵器とともに緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器など平安時代後期の小片が出土した。

土坑

土坑は、調査区東半の北端・中央部・南端で検出した。性格のわかるものはない。

土坑124 調査区北端、高辻小路南築地心想事成線から北へ約0.3mで検出した土坑である。西肩口を検出したのみで、東は調査区外に、南北は攪乱によって失われている。西肩口から2段落ちで東へ下がる。検出面での現存規模は、東西幅約0.8m、南北幅約1.4m、深さ約0.3mある。黒褐色シルト、暗灰黄色シルト黄灰色シルト層が堆積し、黒褐色シルト、暗灰黄色シルトから平安時代前期に属する多くの土師器小片と緑釉陶片がわずかに出土した。

土坑176 調査区中央部、溝175上面で検出した土坑である。平面形は南北に長い歪な楕円形を呈し、長径約1.0m、短径0.65m、深さ約0.1mある。平安時代前期の土師器が出土した。

土坑117 調査区北端、高辻小路南築地心想事成線から北へ約1.3mで検出した土坑である。東西は後世の遺構や攪乱などにより失われている。検出面での現存規模は、東西幅約2.1m、南北幅約1.3m、深さ約0.15mある。土師器・白色土器・瓦器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器など平安時代後期の小片が出土した。

なお、土坑137は、溝175上面でほぼ重複し、溝の堆積土層と考えられる。また、土坑160～162・188は、高辻小路南築地心想事成線から北へ約3.5mで検出し、主軸方向は概して南北方向を示す。

柱穴

柱穴は、調査区内ほぼ全域で検出した。柱穴相互の連続性は見いだせず、建物としてはまとまらない。平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、径0.2～0.6m、深さ0.1～0.3mある。

出土遺物は、平安時代前期から平安時代後期のものがあるが、大半は小破片である。

柱穴184 調査区北部、溝185と重複する状態で検出した柱穴である。平面形は東西に長い楕円形を呈し、検出面での規模は、長径約0.5m、短径約0.3m、深さ0.3mある。平安時代後期の土師器などが出土した。

柱穴74 (図8、図版6-4) 調査区中央部で検出した柱穴である。北・西側は、後世の遺構や攪乱によって失われている。平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径0.36m、深さ0.3mある。掘形の中位から平安時代後期の土師器皿が重なる状態で出土した。

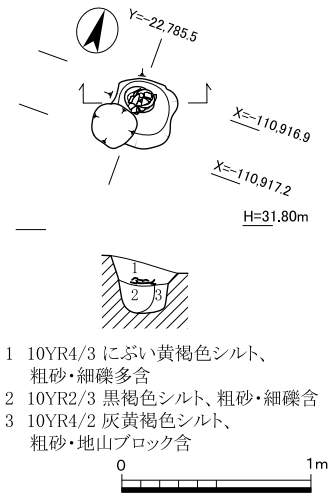


図8 柱穴74実測図 (1:40)

(3) 第2面の遺構 (図版3・7-1)

第2面とした遺構面は、整地土層2層上面であるが、多くは地山上面でも検出した。各遺構から出土した遺物の時期により、鎌倉時代から室町時代前期に属する遺構を第2面の遺構とした。当該期の遺構は、第3面に比べるとやや密度が低い傾向にあるが、調査区のはほぼ全域に分布する。検出した遺構には、溝、井戸、柱穴、土坑などがある。主要な各遺構について次に示す。

溝

溝は、調査区北端で検出した。検出箇所が狭いが、東西方向に延長すると考えている。

溝206 (図9、図版7-3) 調査区北端で検出した東西方向を示す溝である。南肩口を検出した。検出長は、約0.9mある。東西は調査区外へさらに延長し、北肩口は調査区外へ広がる。南肩口は、高辻小路南築地心想定線から北へ約5.2mに位置する。検出面での規模は、幅0.4m、深さ約0.3mある。埋土は、泥土を多量に含んだオリーブ黒色シルトが堆積する。鎌倉時代の多量の土師器とともに、瓦器・焼締陶器、金属製品の鉄釘小片などが出土した。

溝111 (図9) 調査区北端、溝206南肩口上面で検出した東西方向を示す溝状の遺構である。南肩口を検出した。検出長は、約1.5mある。東西は調査区外へさらに延長し、北肩口は調査区外へ広がる。南肩口は、高辻小路南築地心想定線から北へ約4.8mに位置する。検出面での規模は、幅約0.4m、深さ約0.3mある。黒褐色シルトが堆積する。溝底面で柱穴を2基検出した。柱穴の平面形は楕円ないし円形を呈し、検出面での規模は、長径0.3~0.4m、深さ約0.2mある。柱穴の底面には、上面の平坦な長径0.2~0.27mある川原石を据える。川原石心々間の距離は、約0.9mある。オリーブ黒色シルトが堆積する。柱穴の配置から、区画施設の下部構造である布掘り基礎と考えている。鎌倉時代の土師器と

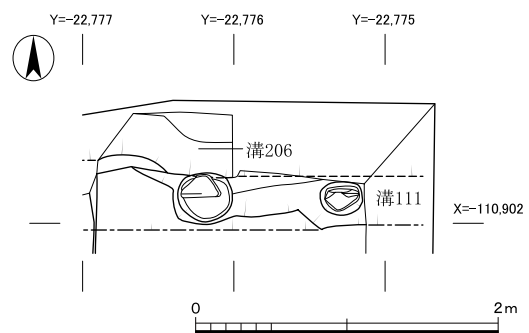
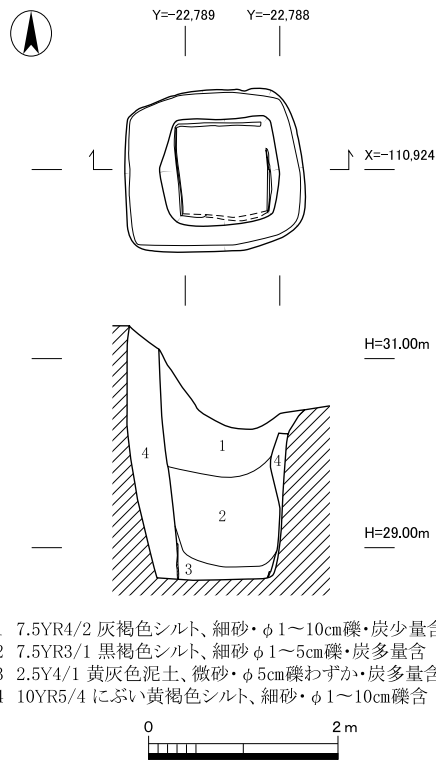
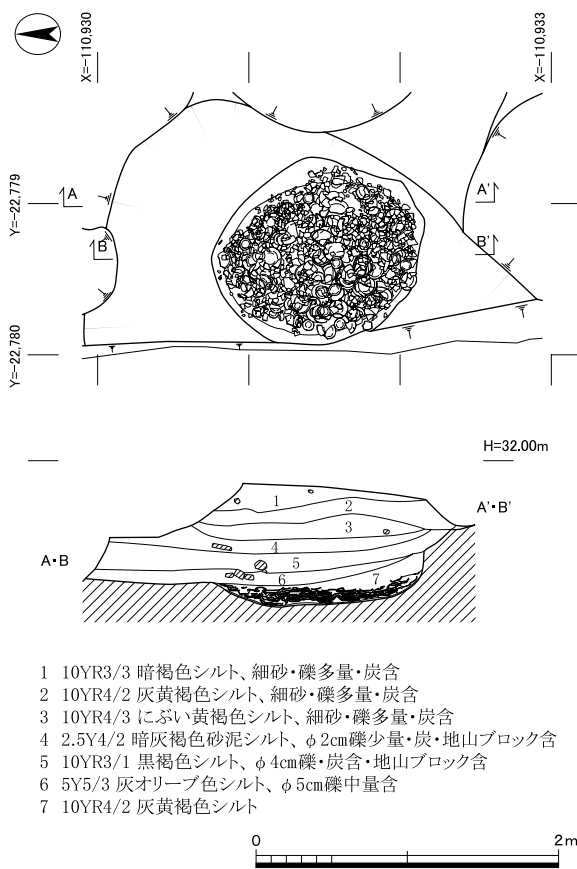


図9 溝206・111平面図 (1:50)



- 1 7.5YR4/2 灰褐色シルト、細砂・φ1~10cm礫・炭少量含
- 2 7.5YR3/1 黒褐色シルト、細砂φ1~5cm礫・炭多量含
- 3 2.5Y4/1 黄灰色泥土、微砂・φ5cm礫わずか・炭多量含
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、細砂・φ1~10cm礫含

図10 井戸57実測図 (1:80)



- 1 10YR3/3 暗褐色シルト、細砂・礫多量・炭含
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト、細砂・礫多量・炭含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト、細砂・礫多量・炭含
- 4 2.5Y4/2 暗灰褐色砂泥シルト、φ2cm礫少量・炭・地山ブロック含
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト、φ4cm礫・炭含・地山ブロック含
- 6 5Y5/3 灰オリーブ色シルト、φ5cm礫中量含
- 7 10YR4/2 灰黄褐色シルト

図11 土坑97実測図 (1:50)

もに瓦器・焼締陶器が出土した。

井戸

井戸は、調査区南西部で3基検出した。このうち、井戸130は、井戸57構築時に大半が失われたと考えられる。また、井戸83は、大半が調査区外にあり、東肩口を検出したにすぎない。

井戸57 (図10、図版8-1) 掘形は、攪乱により上部が失われている。掘形の平面形は歪な方形を呈する。検出面での規模は、東西約1.9m、南北約1.7m、深さ2.7mある。掘形の中央底面に平面形が方形を呈する井戸枠を据える。井戸枠は大半が腐食するが、西側では底面から高さ約0.4m分縦板が遺存していたが、横棧は未検出である。縦板の痕跡から、井戸枠は一辺約1.0mある。井戸枠の主軸方向は、北を示す。底面には、地山ブロックを含む腐植土層である黄灰色泥土が堆積し、腐植土層上には礫

や炭を多く含む黒褐色シルト・灰褐色シルトが堆積する。この土層には鎌倉時代の土師器が多量に出土し、須恵器・瓦器・白色土器・輸入陶磁器も出土している。また、土師器皿などに付着した状態などで金箔が出土した。

なお、井戸130は、井戸57に南接して検出した井戸で、北半は井戸57により井戸枠などは失われている。掘形は、やや歪な方形を呈する。検出面での規模は、一辺約2.0m、深さ約2.1mある。鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。また、井戸83は、調査区西端で検出した井戸で、東肩口以外のは大半は調査区外へ広がる。掘形の平面形は、やや歪な方形を呈し、検出面での現存規模は、南北約2.5m、東西約1.5m、深さ約2.1mある。鎌倉時代の土師器・瓦器が出土した。

土坑

土坑は、調査区内北端および南端で検出し、中央部での分布は少ない。

土坑97（図11、図版8-2・8-3） 調査区南東部で検出した土坑である。四周は攪乱を受け、平面形は不明である。現況では、南北に長い形状を呈し中央部は窪む。検出面での現存規模は、南北長約3.0m、東西長約1.6m、深さ約0.7mある。土坑底面中央部には、主軸方向が西北西-東南東を示す平面形が楕円形を呈する土坑状の段差があり、窪む。窪みの検出面での現存規模は、長径約1.4m、短径約1.2m、深さ約0.4mある。窪み内の堆積土層には、厚い箇所では0.12mの厚さで土師器皿が密着した状態で重なり、土師器間には灰黄褐色シルトが堆積していた。窪み上部は、炭、粗砂・礫を多く含むシルト層が堆積し、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器、銅板・鉄釘小片などが出土した。窪みからは、完形に復元できる土師器、輸入陶磁器など鎌倉時代の土器類が出土した。

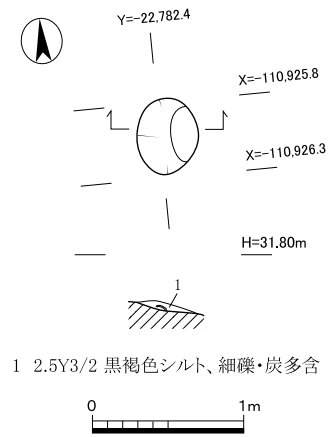


図12 土坑62実測図（1：50）

土坑67 調査区南西隅で検出した土坑である。上部の大半が攪乱を受け、南西肩口が遺存していたに過ぎない。底面は、南西肩口から2段落ちを呈する、検出面での現存規模は、長径約1.9m、短径約0.6m、深さ約0.5mある。暗灰黄色シルトが堆積し、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器など鎌倉時代に属する土器類が出土した。

土坑62（図12） 調査区中央南部で検出した土坑である。南北に長い楕円形を呈する。上部の大半が削平を受け、底部がわずかに遺存していた。検出面での規模は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.07mある。炭を含む黒褐色シルトが堆積し、鎌倉時代の土師器の破片が比較的多く出土した。

柱穴

柱穴は、概して調査区中央部で検出した。第2面でも柱穴相互の連続性は見いだせず、建物としてはまとまらない。平面形は円形ないし楕円形を呈し、検出面での規模は、長径0.2～0.5m、深さ0.1～0.5mある。出土遺物の大半は、小破片である。

（4）第1面の遺構（図版4・9-1）

各遺構から出土した遺物の時期により、室町時代に属する遺構を第1面の遺構とした。当該期の遺構は、調査区のほぼ全域に分布する。検出した遺構には、溝、井戸、柱穴、土坑がある。主要な各遺構について次に示す。図版4で、遺構名の写植色を薄くした遺構は、江戸時代の遺構である。

井戸

第1面では、井戸を2基検出した。

井戸36（図13、図版9-2） 調査区中央北寄りで検出した井戸で、上部は攪乱により削平を受け、北西側掘形から井戸枠にかけてほぼ垂直方向に深く攪乱を受ける。掘形の平面形は円形を呈し、中央に石組みの井戸枠を構築する。井戸枠は、長径0.2～0.3mの川原石を石材とし、積み上げる。北西側の攪乱により、石材が崩落する可能性が高く、石材高で約1.4mまでの調査にとどめた。検出面での規模は、掘形の長径約2.0m、井戸枠内径約1.0mある。深さは、約1.9mまで調査を行っ

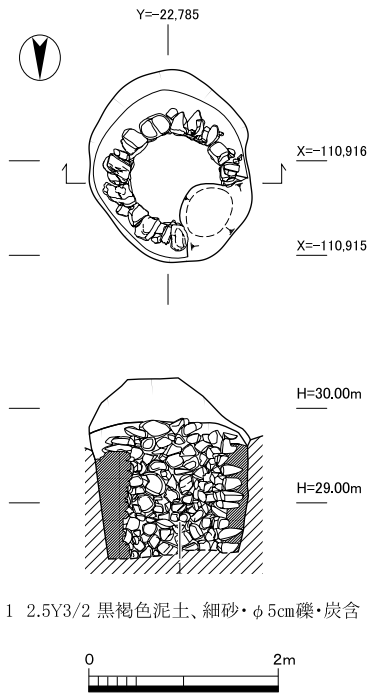


図13 井戸36実測図 (1:80)

は、幅約0.8m、現存長約1.5m、深さ約0.2mある。南辺に沿って径0.1m前後の川原石を長さ約0.5mにわたり、一直線に並べる。底面北西側には、完形に復元できる土師器皿が重なるように出土した。土師器は室町時代後期である。

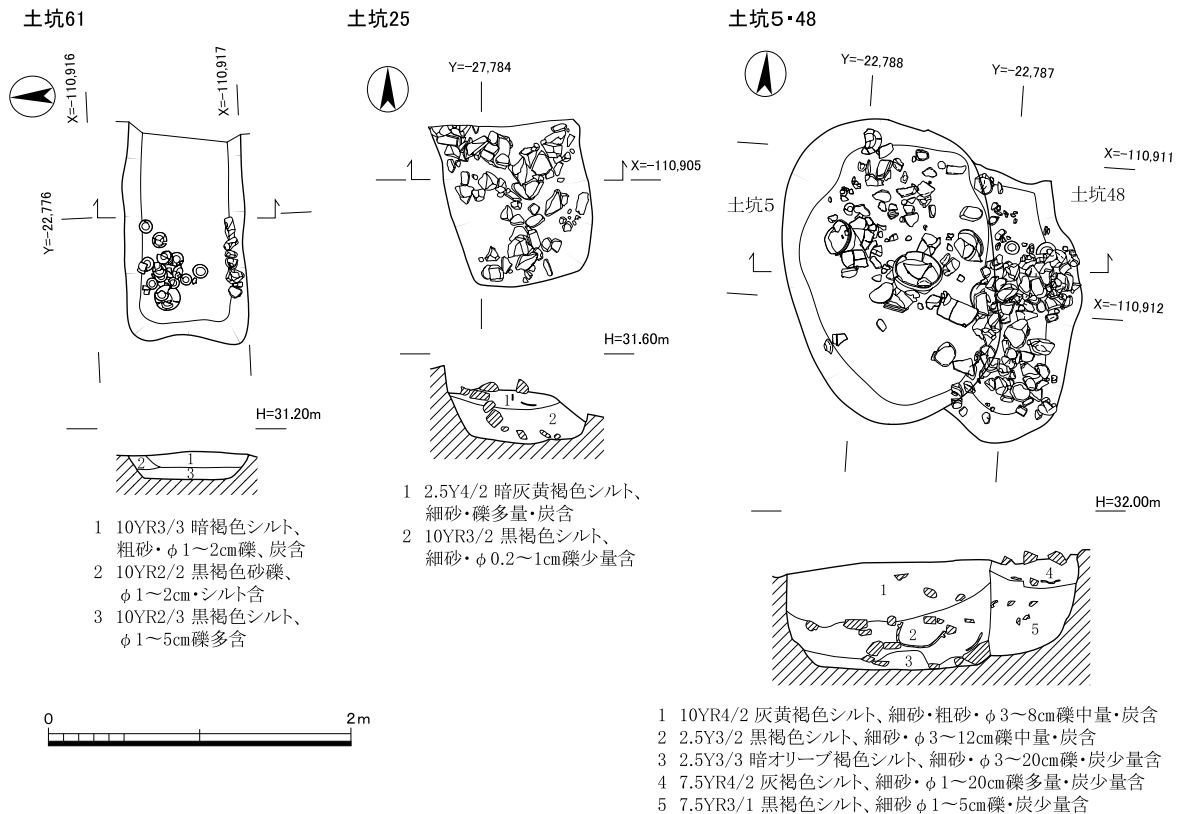


図14 土坑61・25・5・48実測図 (1:80)

た。埋土は、砂礫や炭を多く包含する黒褐色泥土で、土師器・瓦器・灰釉陶器・輸入陶磁器、軒平瓦、鉄釘・銅製品・鉄滓の小片が出土した。土師器の形態から室町時代後期である。

井戸121 調査区南端で検出した井戸と考えられる方形を呈した掘形を有する遺構である。大半は調査区外に広がり、北辺部を検出したにとどまる。北東隅の肩口が遺存し、他は攪乱を受ける。検出面での規模は、一辺約2.7mある。室町時代の土師器・瓦器が出土した。

土坑

調査区全体で検出したが、分布状況はまばらである。規模により大小がある。

土坑61 (図14、図版10-1) 調査区中央東端で検出した平面形が長方形を呈する土坑である。長軸方向はほぼ座標東を示す。検出面から底面まで浅く、上部は大半が攪乱を受けたと考えられる。東肩口は調査区外にある。検出面での規模

土坑25(図14、図版10-2) 調査区中央北端で検出した南北に長く、平面形が長方形を呈する土坑である。北肩口は調査区外へ広がる。検出面での規模は、幅約0.9m、現存長約1.2m、深さ約0.5mある。1層中位および中位底面にかけてから、長軸0.05~0.2mの礫を多量に詰める。1層下面から複数の室町時代後期の土師器皿が出土した。

土坑5(図14、図版10-3) 調査区北西部で検出した。主軸方向が北北西-南南東を示す。検出面での規模は、長軸約2.0m、短軸約1.4m、深さ約0.7mある。埋土には炭、長径0.01~0.2mの川原石や角礫を多量に含み、中位から底面にかけてほぼ完形の瓦器羽釜5個体や土師器皿など室町時代後期の土器類が出土した。

土坑48(図14、図版10-4) 土坑5の東側で検出した土坑で、土坑5により大半は削平を受ける。主軸方向は土坑5と同様である。検出面での現存規模は、長軸約1.9m、短軸約1.0m、深さ約0.6mある。埋土上面には長径0.01~0.2mの川原石や角礫を詰める。角礫下から室町時代後期の土師器皿が、底面直上からは、ほぼ完形の瓦器羽釜が1個体出土した。

柱穴

柱穴は、概して調査区北半で検出したが、建物としてまとまるものはない。

柱穴63(図15、図版9-3) 調査区中央部で検出した。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、長径0.53m、深さ0.53mある。褐色系の土層が堆積し、層中位から室町時代の土師器皿が出土した。

江戸時代の遺構

江戸時代の遺構については、井戸、土坑、柱穴などを検出した。井戸は、25基検出した。このうち、井戸34・45は、近代以降の井戸である。概して調査区中央から東寄りで検出しており、高辻通や猪熊通に面した町屋ごとに付属する井戸であろう。また、土坑の検出例は極めて少なく、調査区西端で検出したにとどまる。従って、調査区内は、町屋の家屋本体の空間であり、投棄穴などを造作する裏庭には至らないと考えられる。町屋の裏庭は、調査区西側に位置するのであろう。

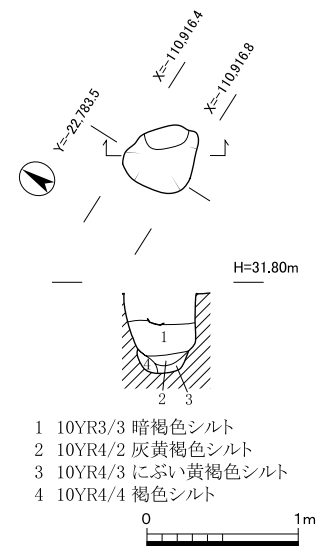


図15 柱穴63実測図(1:50)

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は整理箱55箱ある。出土遺物には土器類、瓦類、石製品、金属製品などがある。出土遺物量の大半は、土器類が占める。土器類には土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、須恵器系陶器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などがある。瓦類には軒平瓦、丸・平瓦がある。石製品には砥石・石製羽釜がある。金属製品には銭貨、鉄釘、金箔などがある。次に主要遺構の出土遺物を中心に述べる。石製品・金属製品は、細片であり図示していない。なお、出土遺物の時期の表記は、平安京・京都Ⅰ期～Ⅳ期の編年案に準用する³⁾。

(2) 平安時代の土器類

整地層出土土器(図16、図版11 4～11) 第2層からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土した。大半は小破片である。

4～6は緑釉陶器である。4は壺である。体部下半は欠損する。体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁部は内側に短く水平方向に端部は丸くおさめる。端部上面は、蓋を受けるため口縁部と体部境に段を有する内面はヨコナデ、外面は密なヘラミガキを施す現存する全面に厚い緑釉を掛ける。口径14.0cm、体部径20.8cmある。Ⅰ期。5は椀である。削り出し高台から体部は内湾気味に開く。体部内外面はヨコナデ、内外面とも密なヘラミガキを施す。全面に薄い緑釉を掛ける。口径17.2cm、器高5.1cm、底部径7.4cmある。Ⅱ期。6は椀である。高台を欠損する。体部は外傾し、口縁端部は丸くおさめる。端部内面に1条の凹線を巡らす。内外面とも密なヘラミガキを施す。体部内面に雲状の陰刻を施す。内外面ともやや薄い緑釉を施す。口径20.0cm。Ⅱ期。

7・8は土師器皿Aである。平らな底部から口縁部は外反し、口縁端部は上方に短くつまみ上げる。底部外面はオサエ、他はナデを行う。口径14.8cm・16.0cmある。9は土師器杯Aである。平ら

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、瓦器、瓦、金属製品		土師器47点、黒色土器1点、緑釉陶器8点、灰釉陶器3点、白色土器1点、瓦器1点、瓦4点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、瓦、金属製品		土師器47点、須恵器3点、瓦器1点、輸入陶磁器2点		
室町時代	土師器、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、瓦、金属製品		土師器97点、輸入陶磁器1点、瓦器6点、瓦1点		
合 計		75箱	223点 (17箱)	13箱	45箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

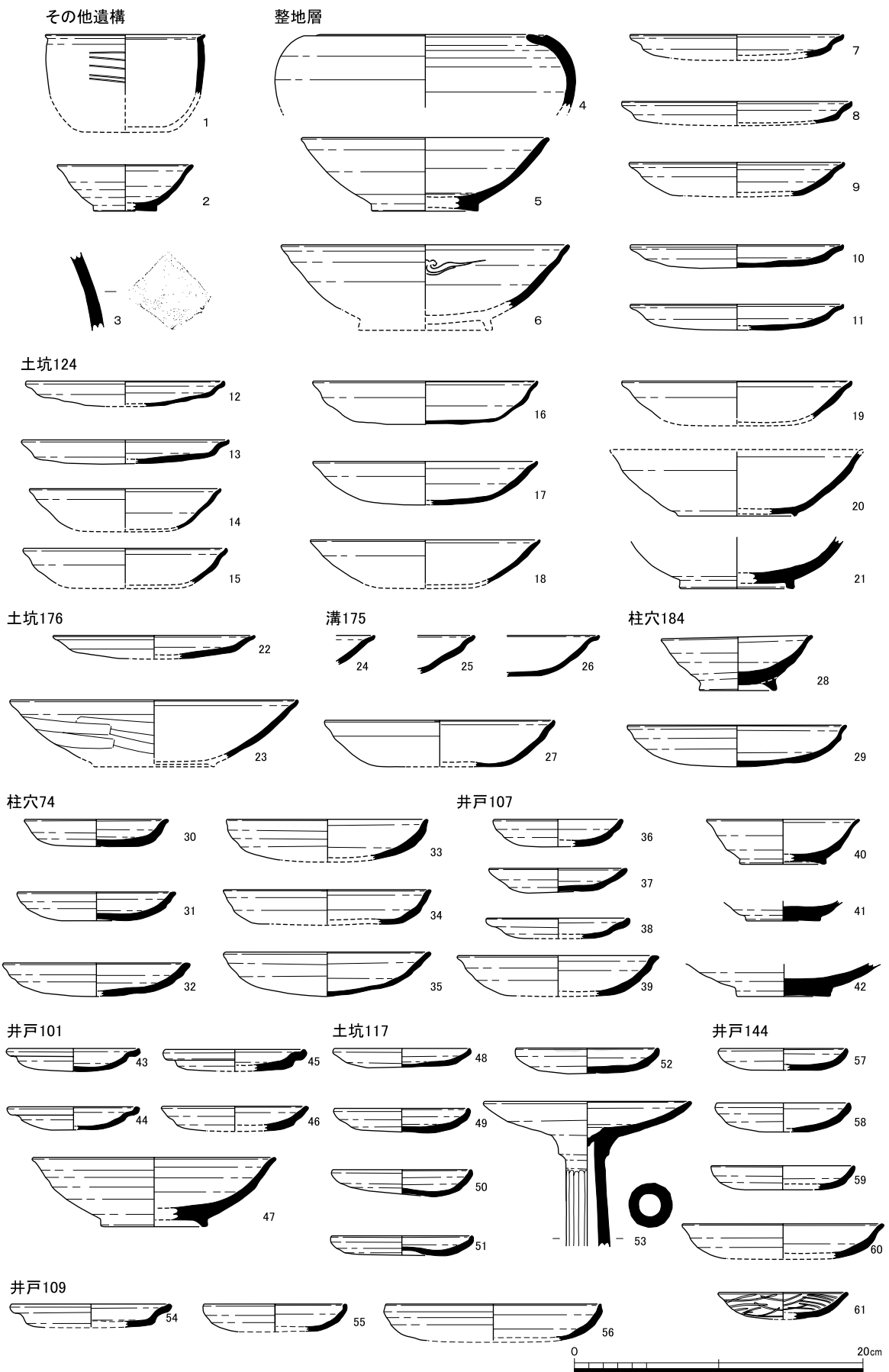


図16 平安時代遺物実測図 (1 : 4)

な底部から体部は直線的に外傾する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅱ期中段階。

10・11は土師器皿Aである。短い平らな底部から口縁部は外反し、端部は上方に短く立ち上がる。底部外面はオサエ、他はナデを行う。10は口径14.8cm、器高1.6cm、11は口径14.8cm、器高1.8cmある。Ⅱ期新段階。10・11とも第1層から出土したものであるが、形態からここに示しておく。

土坑176出土土器（図16、図版11 22・23）22は土師器皿Aである。広い底面に屈曲した口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。口径14.0cmある。23は土師器杯Bである。底部は欠損する。体部は外上方に開く。口縁部はわずかに屈曲し、端部は丸くおさめる。口径20.0cm。いずれも底部・体部外面はオサエ、他はナデ、23は体部外面にやや粗いヘラケズリを行う。Ⅱ期古段階。

溝175出土土器（図16、図版11 24～27）24は土師器杯Aである。やや広い底面から体部は外上方に開く。口縁部はわずかに屈曲し端部は上方に短くつまみ上げる。口径16.0cm、器高3.2cmある。底部・体部外面はオサエ、他はナデを行う。25～27は土師器杯Aと考えられる破片である。Ⅱ期古段階。

他遺構出土土器（図16、図版11 1～3）1は中世の土坑115から出土した黒色土器Aで、体部過半を欠損する。体部は立ち上がり口縁端部は短く外反する。体部外面はヨコ方向に粗いヘラミガキを施す。口径11.0cm。Ⅱ期。2は中世の土坑24から出土した緑釉陶器小椀である。削り出しの平高台から体部は緩やかに内湾気味に立ち上がり口縁端部は外傾する。底部外面を除き薄い緑釉を掛ける。口径9.4cm、器高3.2cm、底部径4.4cmある。Ⅱ期。3は鎌倉時代の井戸57から出土した緑釉陶器の大型容器の破片である。内面はやや粗く、外面は密にヘラミガキを施す。外面には花文状の陰刻を配する。内外面とも薄い緑釉を施す。現存厚0.8cm。Ⅱ期。

土坑124出土土器（図16、図版11 12～21）12・13は土師器皿Aである。広い底面に屈曲した口縁部が付く。口縁端部は短く上方につまみ上げる。12の口径13.8cm、13の口径14.4cm、器高1.65cmある。14～16は土師器椀Aである。やや小さい底部から体部は外上方に開く。口縁部はわずかに屈曲し端部は丸くおさめる。14は口径13.4cm、15は口径15.6cm・器高3.0cm、16は口径16.0cmある。17～19は土師器杯Aである。やや広い底面から体部は外上方に開く。口縁部はわずかに屈曲し、端部は丸くおさめる。17は口径14.0cm、18は口径15.6cm・器高3.0cm、19は口径16.0cmある。20は土師器杯Bである。体部は外上方に開く。口縁端部は欠損する。底部外面に低い高台を貼り付ける。底部径8.0cmある。12～20は、いずれも底部・体部外面はオサエ、他はナデを行う。

21は緑釉陶器椀である。口縁部は欠損する。底部外面に削り出しの輪高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも密なヘラミガキを施す。全面にやや厚めの緑釉を施す。高台径7.8cmある。Ⅱ期中段階。

柱穴184出土土器（図16、図版12 28・29）28は小型の山茶椀である。底部外面に貼り付けの輪高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。体部内面に薄い灰釉が付くが、底部には重ね焼きの範囲には灰釉は付かない。底部外面は糸切り、体部内外面はヨコナデを行う。口径10.5cm、器高3.8cm、底部径5.4cm。

29は土師器皿Nである。やや丸みを持つ底部から体部は内湾しつつ開く。口縁部は外反する。底部・体部外面はオサエ、他はナデを行う。口径15.2cm、器高2.9cmある。IV期中段階。

柱穴74出土土器（図16、図版12 30～35） 30～35は土師器皿Nで、口径により大小がある。平らな底部から体部が外傾する。口縁部は2段ナデを行い、端部は外反する30・34と、やや丸みを持つ底部から体部が内湾しつつ開き、口縁部が外反する31・32・33・35がある。30は口径10.0cm、器高1.9cm、34は口径14.2cmある。31は口径11.0cm、器高2.0cm、32は口径13.0cm、器高2.1cm、33は口径14.0cm、35は口径14.4cm、器高3.1cmある。いずれも底部・体部外面はオサエ、他はナデを行う。IV期新段階。

井戸107出土土器（図16、図版12 36～42） 36は土師器皿Aである。平らな底部から口縁部は屈曲し、口縁端部は上方に短くつまみ上げる。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。37～39は土師器皿Nで、口径により大小がある。平らな底部から体部は外傾する。39は2段ナデを行い、口縁端部は外反する。37・38は口縁端部を丸くおさめる。39は外反する。V期古段階。

40は小型の山茶椀である。底部外面に貼付けの扁平な高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。体部外面下半に腰折れ状の段が付く。底部外面は糸切り、体部内外面はヨコナデを行う。口径10.6cm、器高3.1cm、底部径6.0cm。

41・42は緑釉陶器である。体部は欠損し、平高台が遺存する。41は底部径5.2cm、42は底部径6.5cmある。IV期新段階。

井戸101出土土器（図16、図版12 43～47） 43～45は土師器皿Aである。平らな底部から口縁部は屈曲し、口縁端部は上方に丸くおさめる。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。口径9.2～10.0cm、器高1.6ある。46は土師器皿Nである。平らな底部から体部は外傾する。口縁端部は丸くおさめる。口径10.2cmある。

47は山茶椀である。底部外面に低い高台を貼り付ける。体部は外上方に開き、口縁端部は外傾する。体部中位は腰折れ状を呈する。体部内面にごく薄い灰釉が掛かる。底部外面は糸切り、体部はヨコナデを行う。底部内面は滑らかである。口径16.9cm、高さ4.8cm、底部径7.3cmある。V期古段階。

土坑117出土土器（図16、図版12 48～53） 48～52は土師器皿Nである。平らな底部から体部は短く外傾する。口縁部は上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。口径9.5～9.9cm、器高1.3～1.9cmある。

53は白色土器高杯である。脚部中位以下は欠損する。杯部底部に断面円形の脚部を接合し、補足粘土を巻き付ける。杯部は緩やかに開き、口縁端部は丸くおさめる。杯部の中央部は窪む。杯部・接合部はナデ、脚部はタテ方向に幅の狭いヘラケズリを行う。口径14.4cmある。V期中段階。

井戸109出土土器（図16 54～56） 54は土師器皿Aである。平らな底部から口縁部は屈曲し、端部は丸くおさめる。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。口径11.2cmある。55・56は土師器皿Nである。平らな底部から体部は外傾する。口縁部は上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部外面はオサエ、他はナデを行う。55は口径10.0cm、56は口径15.0cmある。V期新段階。

井戸144出土土器（図16 57～61） 57～60は土師器皿Nで、大小がある。57～59は平らな底部から体部は短く外傾する。口縁部は上方に立ち上がる。口径9.0～10.0cm、器高1.7cm・1.9cmある。60は平らな底部から体部は外傾し、口縁端部は外反する。口径14.0cmある。これらの底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。61は瓦器皿である。底部は丸みを持ち、口縁部は外傾する。内外面とも粗いヘラミガキを施す。口径9.0cmある。V期新段階。

（3）鎌倉時代の土器類

井戸57出土土器（図17、図版12 62～85） 62～81は土師器皿Nで、口径により大小がある。62～73は小で、底部から口縁部が短く開き、端部は丸くおさめるものと、63・65のように上方に立ち上がるものがある。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。口径8.4～9.3cm、器高1.6～1.8cmある。74～81は大に属する。平たい底面から体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げ、断面三角形状を呈する。底部外面・体部下半はオサエ、他はナデを行う。口径12.2～14.0cm、器高2.1～2.9cmある。

82・83は須恵器椀である。底部外面は糸切り痕跡が残る。体部は平底から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる体部内外面ともヨコナデを行う。82は口径14.6cm、高さ4.6cm、底部径6.4cmある。83は口径14.6cm、高さ4.7cm、底部径6.0cmある。備前産。

84は輸入陶磁器の青白磁合子身である。底部は中心に向かって浮き上がる。体部は短く内湾し、受部上端はやや広がる。口縁部内面にやや内傾気味の立ち上がりを持つ。体部外めには型押しの花文を巡らす。体部下半と口縁部には釉を掛けない。口径5.5cm、高さ2.3cm、底部径4.4cmある。85は輸入陶磁器の青磁皿である。底部外面は回転ヘラケズリ、体部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。底部内面には櫛描文を施す。底部外面を除き全釉を掛ける。口径10.2cm、高さ2.1cmある。VI期中段階。

溝206出土土器（図17、図版13 86～93） 86～89は土師器皿N小である。底部から口縁部が短く開き、端部は丸くおさめる。口径8.6～9.5cm、器高1.3～1.5cmある。90～93は土師器皿N大である。平らな底部から体部は外傾する。口縁部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめるか、短く立ち上がるものがある。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。VI期中段階。

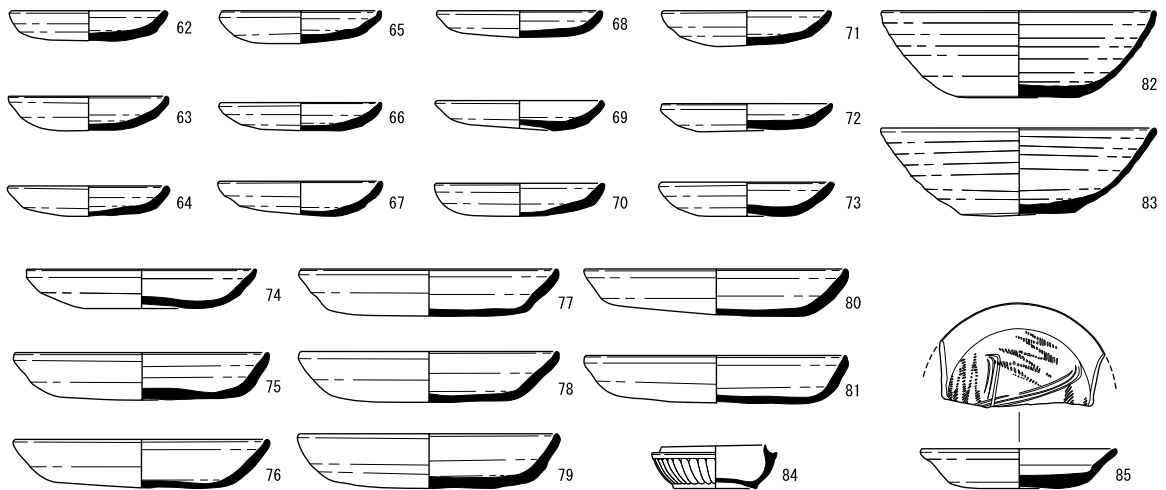
溝111出土土器（図17、図版13 94～105） 94～101は土師器皿N小である。底部から口縁部が短く開き、端部は丸くおさめる94・97～100と、口縁部が直線的に外傾する95・96・100がある。口径7.4～9.8cm、器高1.1～1.6cmある。102～105は土師器皿N大である。底部から体部がわずかに屈曲しつつ開き、口縁端部は断面三角形状を呈する102・104・105と、体部が直線的に外傾する103がある。口径11.6～13.4cm、器高2.0～2.4cmある。これらの底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。VII期古段階。

土坑67出土土器（図17、図版13 106～110） 106は土師器皿N大である。底部から体部がわずかに屈曲しつつ開き、口縁端部は断面三角形状を呈する。口径12.0cm、器高2.2cmある。107は土師器皿S中である。やや丸みのある底部から体部はわずかに屈曲して開く。口縁端部は丸くおさめ

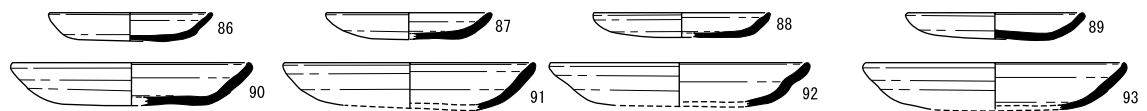
る。口径11.6cm、器高2.5cmある。108は土師器皿S大である。やや丸みのある底部から体部はわずかに内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は上方につまみ上げる。これらの底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。109は須恵器鉢である。底部は欠損する。体部は直線的に開き、口縁端部は玉縁状を呈する。体部内外面はヨコナデを行い、内面は使用痕による凹凸がある。口径28.2cm。東播系。110は瓦器火鉢である。平底から体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部に面を持つ。体部内外面はヨコナデを行う。口径32.4cm、器高9.1cmある。Ⅶ期古段階。

土坑62出土土器（図17、図版13 111～114） 111・112は土師器皿Shである。底部中央は上

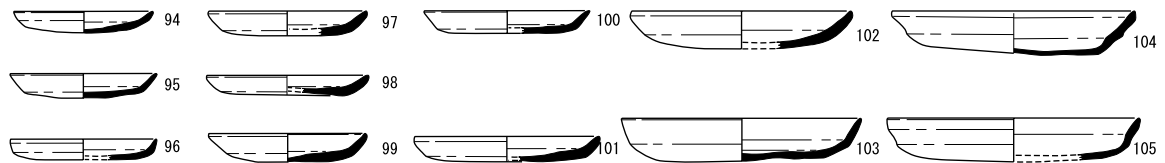
井戸57



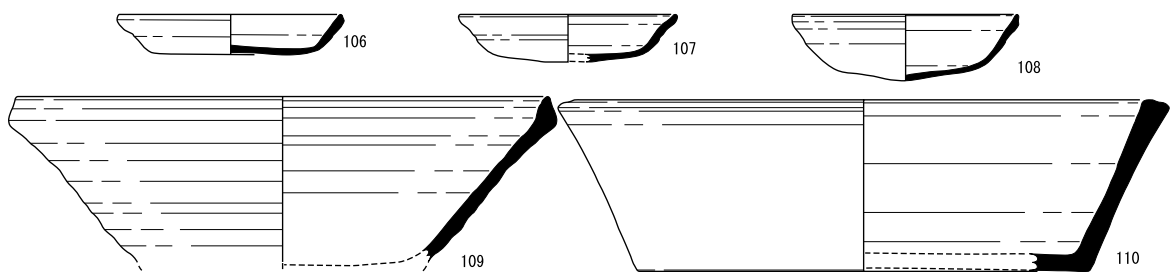
溝206



溝111



土坑67



土坑62

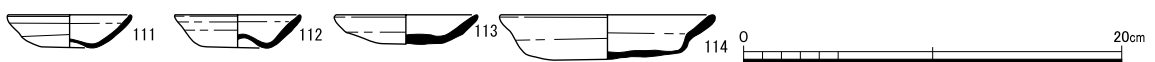


図17 鎌倉時代遺物実測図1（1：4）

土坑97

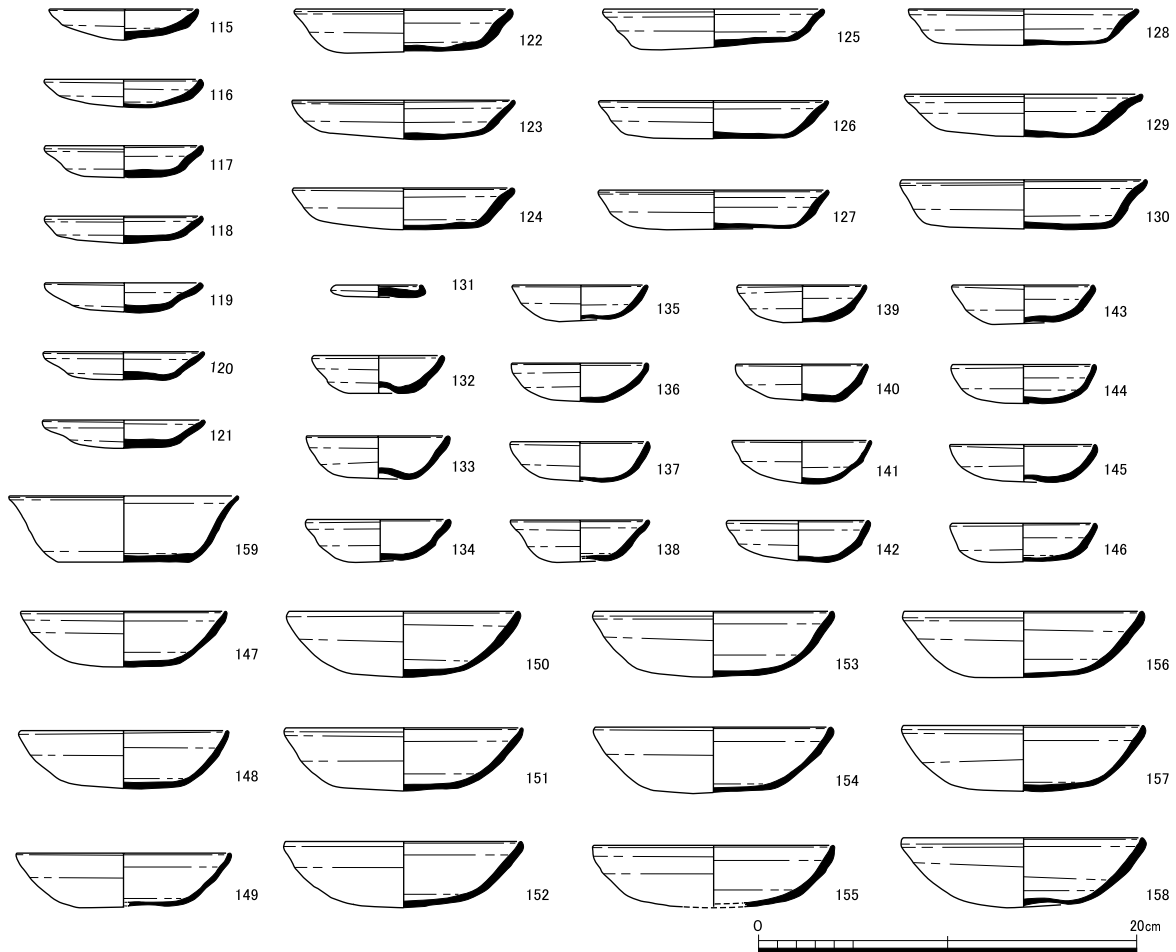


図18 鎌倉時代遺物実測図2 (1:4)

方に膨らみ、体部は内湾気味に開く。口径6.6cm・6.7cm、器高1.8cmある。113は土師器皿N小である。底部と口縁部の境は窪む。体部は短く開き、口縁端部は丸くおさめる。口径7.6cm、器高1.7cmある。114は土師器皿N大である。底部から体部下半は屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。口径11.4cm、器高2.4cmある。これらの底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅶ期新段階。

土坑97出土土器(図18、図版13 115～159) 115～121は土師器皿N小である。底部から口縁部が短く開く115・116と、わずかに屈曲するものがある。口径7.9～8.6cm、器高1.5～1.7cmある。122～130は土師器皿N大である。平たい底面から体部はわずかに屈曲してに立ち上がる。口縁端部は上方に丸くおさめる。口径11.4～13.1cm、器高2.1～2.7cmある。131は土師器皿Acである。底部から口縁端部が内側に屈曲する。口径4.6cm、器高0.7cmある。132～134は土師器皿Shである。底部中央はわずかに上方に膨らみ、体部は内湾気味に開く。口径7.0～7.7cm、器高2.0～2.3cmある。135～146は土師器皿S小である。やや丸みのある底部から体部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに上方につまむ。口径7.2～7.8cm、器高1.9～2.3cmある。147～158は土師器皿S大である。やや丸みのある底部から体部は内湾しつつ立ち上がる。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ、丸くおさめる。口径10.9～13.0cm、器高2.9～3.7cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。

159は輸入陶磁器の白磁皿である。底部外面は回転糸切り、体部下半は回転ヘラケズリを行う。体部は上方に開き、口縁部は外傾する。内面は底部と体部の境界に凹線を巡らす。全面に釉薬を掛けるが、口縁端部は掻き取る。口径12.0cm、高さ3.5cm、底部径7.0cmある。Ⅶ期古段階。

なお、上層から鉄釘・銅板片が出土した。

(4) 室町時代の土器類

土坑61出土土器(図19、図版14 160～180) 160は土師器皿Shである。底部中央は上方に膨らみ、体部は屈曲しつつ開く。口縁端部は上方につまみ丸くおさめる。口径6.6cm、器高2.0cmある。161～168は土師器皿N小である。底部から体部下半は屈曲し開く。体部と口縁部界に膨らみを持つ。端部は丸くおさめる。口径7.3～8.9cm、器高1.5～1.9cmある。169～174は土師器皿N大1である。底部から体部下半は屈曲し開く。体部と口縁部界に膨らみを持つものもある。口縁端部は丸くおさめる。口径9.0～8.4cm、器高1.7～2.0cmある。175～177は土師器皿N大2である。N大1と概して同形態を示す。口径11.5～12.0cm、器高2.2～2.6cmある。178～180は土師器皿S大である。やや丸みのある底部から体部は開く。口縁部はわずかに屈曲し、端部は上方にわずかにつまみ上げ、丸くおさめる。口径16.2cm、器高3.3cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅸ期古段階。

土坑25出土土器(図19、図版14 181～185) 181は土師器S系の皿である。丸い底部から口縁部は内湾し、端部は丸くおさめる。口径5.2cm、器高1.5cmある。182は土師器皿Shである。底部中央は上方に膨らみ、体部は屈曲しつつ開く。口縁端部は上方につまみ丸くおさめる。口径7.1cm、器高1.8cmある。183は土師器皿Nである。底部から体部下半は屈曲し開く。体部と口縁部界に膨らみを持つ。口縁端部は丸くおさめる。口径11.5cm、器高2.9cmある。184・185は土師器皿S大である。

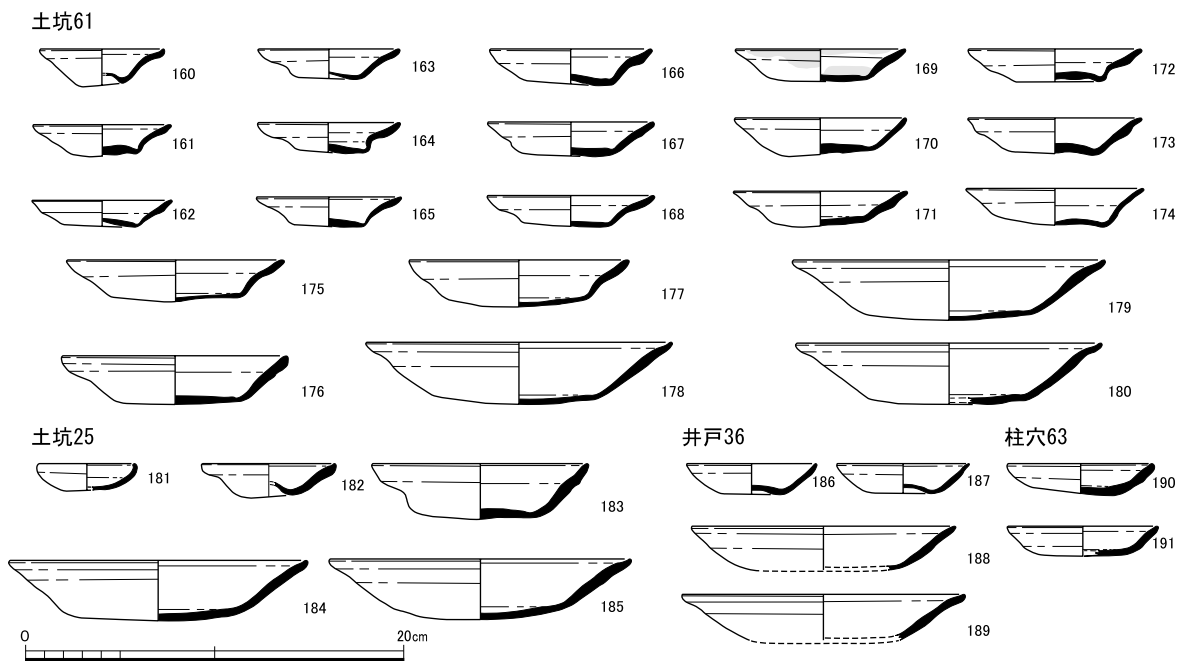
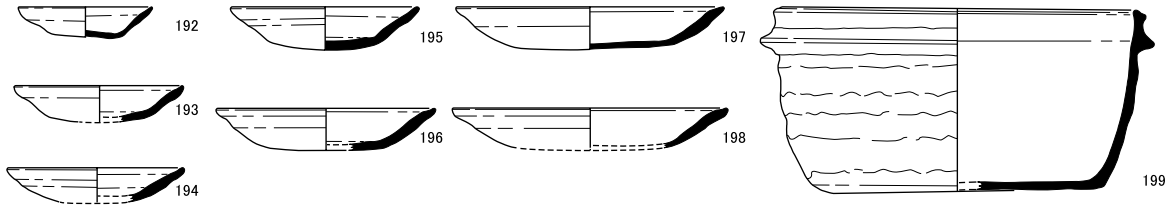


図19 室町時代遺物実測図1 (1:4)

土坑48



土坑5

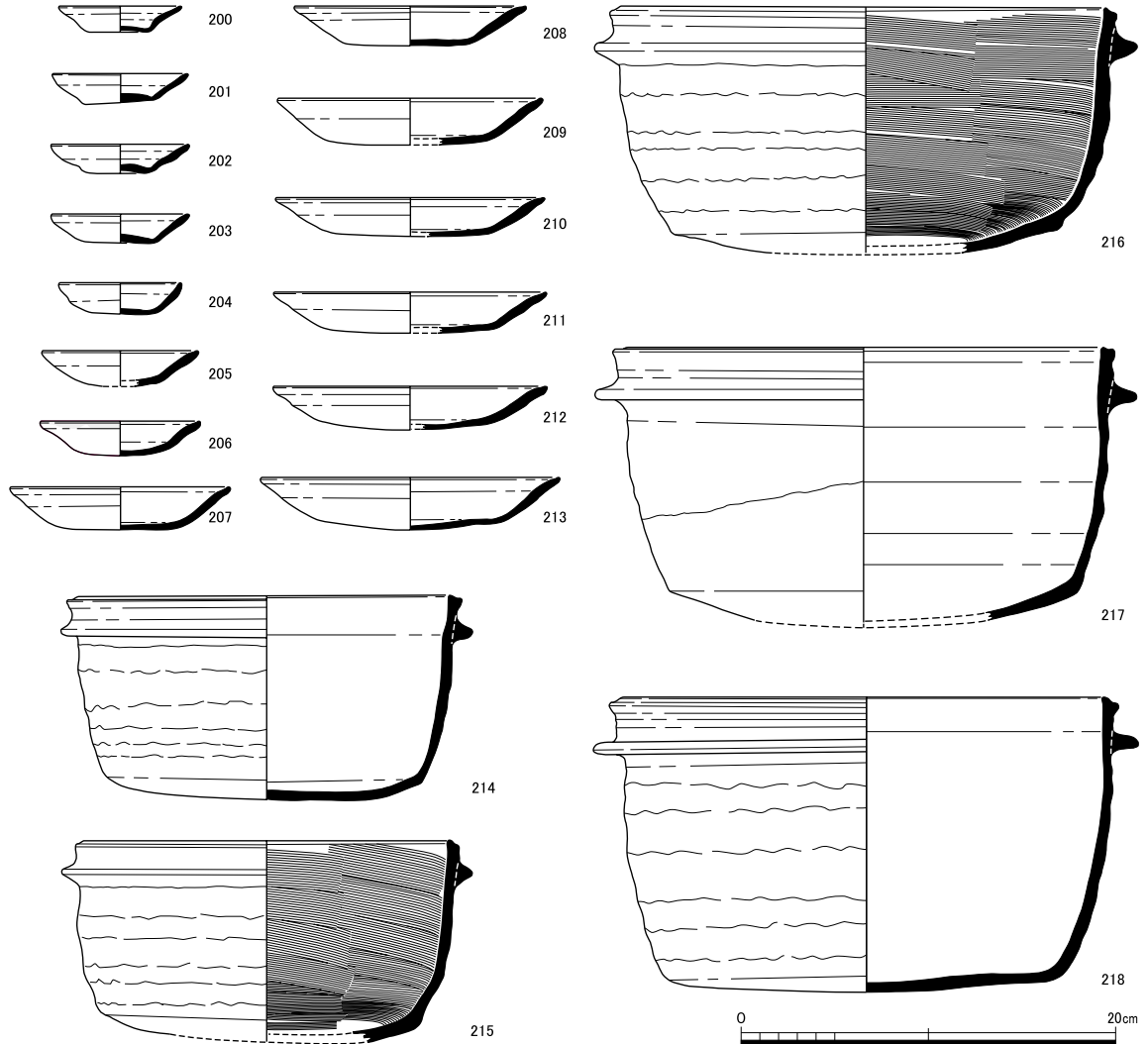


図20 室町時代遺物実測図2 (1:4)

やや丸みのある底部から体部はわずかに外反しつつ開く。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ、丸くおさめる。口径15.8cm・16.0cm、器高3.2cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅸ期中段階。

井戸36出土土器 (図19、図版14 186~189) 186・187は土師器皿Shである。底部中央は上方にわずかに膨らみ、体部は屈曲しつつ開く。口縁端部は丸くおさめる。口径6.9cm・7.0cm、器高1.6cm・1.7cmある。188・189は土師器皿S大である。やや丸みのある底部から体部は外反しつつ開く。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ、丸くおさめる。口径14.0cm・15.0cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅸ期中段階。

金属製品では、鉄釘・銅板などの小片や鉄滓片が出土した。

柱穴63出土土器（図19、図版14 190・191）190・191は土師器皿N小である。底部から体部はわずかに屈曲し開く。口縁端部は丸くおさめる。口径7.8cm・8.0cm、器高1.6cm・1.7cmある。底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。Ⅷ期古段階。

土坑48出土土器（図20、図版14 192～199）192は土師器皿Shである。底部中央は上方にわずかに膨らみ、体部はわずかに屈曲して開く。口縁端部は丸くおさめる。口径7.0cm、器高1.7cmある。193・194は土師器皿S小である。やや丸みのある底部から体部は開く。口縁端部はわずかに上方につまむ。口径9.0cm・9.4cmある。195・196は土師器皿S中である。やや丸みのある底部から体部はわずかに屈曲し開く。口縁端部は上方にわずかにつまみ丸くおさめる。口径10.0cm・11.6cm、器高2.2cm・2.3cmある。197・198は土師器皿S大である。平らな底部から体部は開く。口縁部は外方へ開き端部は丸くおさめる。口径14.2cm・14.6cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。

199は瓦器羽釜である。平たい底部から体部は内湾気味に上方へ立ち上がる。口縁端部は上面に面を持ち、端部は内上方へつまむ。体部外面の口縁部直下に幅の狭い鏝が巡る。体部内面から口縁部はナデ、体部外面はヨコ方向に連続してオサエを行う。口径19.7cm、器高9.9cmある。

土坑5出土土器（図20、図版14・15 200～218）200～203は土師器皿N小である。体部下半はわずかに屈曲し開く。口縁端部は丸くおさめる。口径6.6～7.4cm、器高1.4～1.6cmある。204～206は土師器皿S小である。やや丸みのある底部から体部は開く。口縁端部は丸くおさめる。口径6.6～8.6cm、器高1.7～1.9cmある。207～213は土師器皿S大である。平らな底部から体部はわずかに屈曲し開く。口縁端部は上方にわずかにつまみ丸くおさめる。口径14.4～16.0cm、器高2.1～2.8cmある。これらは、底部・体部下半外面はオサエ、他はナデを行う。

214～218は瓦器羽釜である。やや丸みのある底部から体部は上方へ立ち上がる。底部と体部の境に強い稜を持つ。口縁端部は上面に面を持ち、端部は内上方へつまむ。体部外面の口縁部直下に幅の狭い鏝が巡る。214・217は、体部内面から口縁部はナデ、他はヨコ方向のハケメを行う。体部外面はヨコ方向に連続してオサエを行う。217の体部にはナナメ方向の粘土接合痕が残る。口径20.0～26.8cm、器高9.9～15.8cmある。Ⅸ期新段階。

（5）出土軒瓦（図21、図版15）

瓦1は唐草文軒平瓦である。中心飾りは上向きC字形で中に三葉形、上に対葉花文を配す。唐草文は両側に3回反転する。主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込む。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面は横ケズリ後横方向のナデを行う。平瓦凹面はナデで一部布目残存、凸面はナデ、側面縄タタキを施す。胎土は砂粒をやや多く含み灰白色である。やや硬質である。表面は暗灰色である。平安時代前期。『平安京古瓦図録』⁴⁾316・329、西賀茂NS202A、大山崎窯・吉志部窯と同範である。胎土の状況から、西賀茂角社東群産と推定できる。土坑37出土。

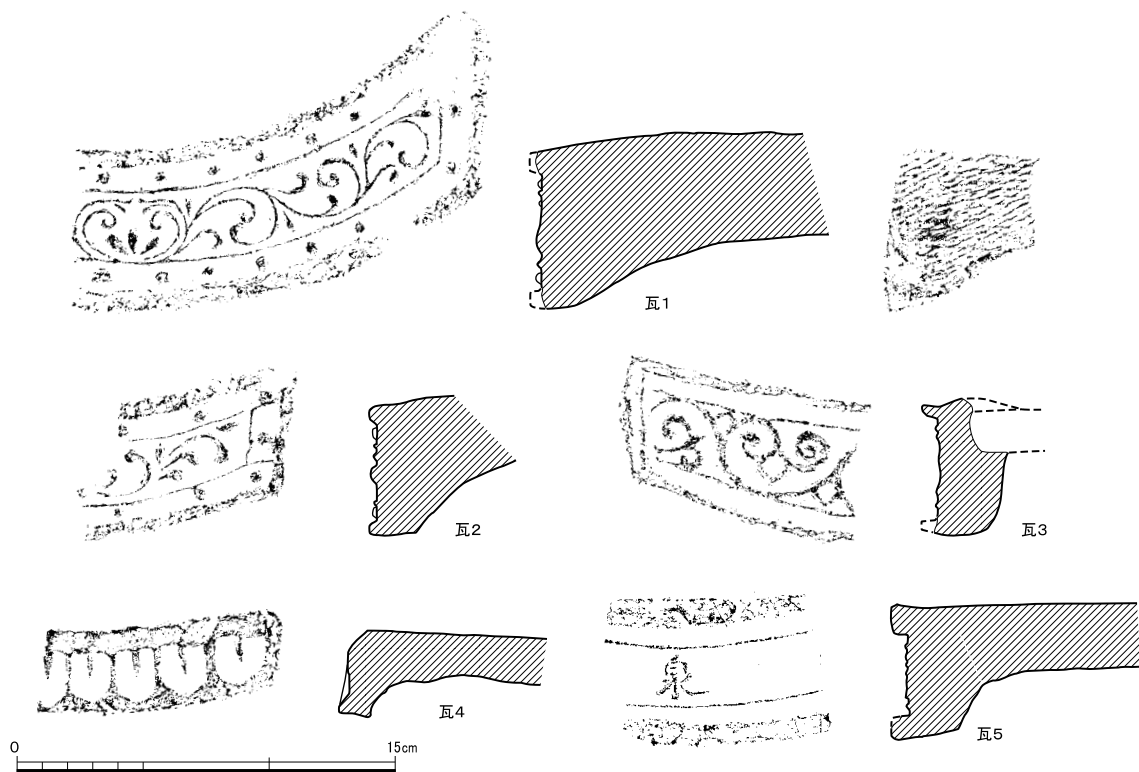


図21 出土軒瓦拓影・実測図（1：3）

瓦2は唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に反転する。唐草文は各单位が離れ、主葉はやや強く巻き込む。上下界線が脇縁まで延びる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ナデを施す。顎部下面はヨコケズリである。平瓦凸面は縦ケズリ、側面縦ケズリを施す。胎土は砂粒を含み灰白色である。やや軟質である。表面は部分的に暗灰色である。時期不明・産地不明。井戸3出土。

瓦3は唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に反転する。唐草主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込み、房が付く。周縁は素文である。瓦当部成形は包み込み技法。瓦当部上縁は横ナデ、下面・裏面は横ナデを施す。胎土は砂粒を少量含み暗灰色である。硬質である。瓦当文様は、播磨神出窯・林崎三本松瓦窯出土瓦に類似する。播磨産。平安時代後期。土坑187出土。

瓦4は剣頭文軒平瓦である。剣頭文は陰刻で、下向きである。周縁は素文である。瓦当面に布目が残存する。瓦当部成形は折り曲げ成形である。段顎である。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面横ケズリ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面は布目、凸面はオサエ後ナデ、側面は縦ケズリを施す。平瓦凹面にヘラ記号「キ」あり。胎土は砂粒を少量含み灰白色である。やや硬質。瓦当文様は、山城幡枝窯出土瓦に類似する。山城産。平安時代後期。土坑99出土。

瓦5は文字文軒平瓦である。内区中央に「泉」銘を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は瓦当貼り付け成形で、段顎である。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面は布目、凸面はナデを施す。胎土は砂粒が少なく灰色、堅致。表面は燻して黒灰色である。内区文字は「神泉苑」と推定できる。平安京左京四条二坊十四町跡⁵⁾・平安京左京三条二坊十町跡⁶⁾出土瓦と同範。鎌倉時代から室町時代。井戸36出土。

5. ま と め

今回の調査で、当該地は断続的ながら平安時代以降活発に土地利用が行われていたことが判明した。

平安時代の遺構の時期は、出土遺物から9世紀、11世紀、12世紀に属するものがある。検出した遺構のうち、溝は主軸方向が東西・南北を示すものがそれぞれあるが、四行八門制の想定線とは一致せず、これらに規制を受けない四町内北東部の空間を区画する施設と考えられる。井戸については、木枠の規模が井戸107で一辺約0.8m、井戸101で一辺約0.9m、井戸109で一辺約1.0m、井戸144で一辺約1.1mあり、時代が下がるに従って若干大型化するが、いわゆる平安京跡で検出される一般的な規模を超えるものではない。また、柱穴はいずれも小規模なものである。したがって、当該地が五条後院であると想定した場合、主要施設が配置された空間ではなく、雑舎空間であると考えられる。なお、現高辻通歩道で過去に検出された高辻小路北側溝と対になる南側溝は、今回の調査区内では未検出である。遺物では、猿投産と考えられる9世紀に属する緑釉陶器壺(図16-4)がある。緑釉は厚く、発色のよい優品であり、所有者の階層を示すものであろう。

鎌倉時代の遺構については、規模の明確な井戸が1基(井戸57)あり、木枠の規模は一辺約1.0mと一般的である。柱穴は、いずれも小規模なものであり、建物としてはまとまらない。これらの遺構の規模などから、当該地が五条院と想定した場合、一時代前の五条後院の時期の空間利用と同様に、雑舎的な空間形態が想定できる。







一方、条坊路である高辻小路南側溝ないし区画施設に相当すると考えた溝206や溝111は、高辻小路南築地心想定線から北へ約5mに位置する。小路の規格では、築地心想事成線から約2mで溝の肩口に至る。よって、溝206は、かなり道路中心寄りに位置することが判明した。現在の高辻通の南北位置は、平安時代の高辻小路の想定位置から道路幅分北に位置する。当該時期には、徐々に南から道路幅が狭まった可能性がある。

室町時代以降の遺構については、室町時代前半の遺構は検出できなかったが、室町時代後半には、井戸・土坑・柱穴などが調査区内に点在する。遺構の遺存状況を窺うと、概して高辻小路側寄りに展開するようであり、高辻通側に面した町屋が形成されたと捉えることもできる。

当該地の地名である十文字町は、寛永14年(1637)の洛中絵図に高辻通に面した両側町として「十文字丁(町)」と記されている。今回の調査では、高辻通とともに猪熊通に面した町屋に付属すると考えられる井戸を多数検出しており、当該地が各通りに面して町屋化していたことを裏付けている。また、前代の室町時代後半から既に町家化が進んでいたことも明らかにすることができた。

また、出土遺物に関しては、五条院の時期の遺構と考えられる鎌倉時代の土坑97出土遺物を挙げておく。この土坑は、上部が厚く土層で覆われており、下層の窪みに堆積していた多量の土師器群は、投棄されたままの状態に遺存していたと考えてよい。この一括土師器について、種類別に分類し、結果を表3に示した。土師器の器形は、皿N小・皿N大・皿S小・皿S大・皿Sh・皿Acが

表3 土坑97出土土器器形分類表

器形 残存率	皿 N小	皿 N大	皿 S小	皿 S大	皿 Sh	皿 Ac
						
1/2以上	53	69	85	57	6	1
1/2～1/3	12	25	6	36	-	-
合計	65	94	91	93	6	1

ある。皿Shと皿Acは数量が少量であり除外すると、皿4種が残り、大多数を占める。このことから、この一括投棄された土師器群は、皿4種で1組を構成していたと考えられる。この皿4種が一つの膳の器種構成とすると、一度に数十から百名ほどに食事を提供したことを示すものと考えられる。当地が五条院の推定地であることを考えあわせると、非常に興味深い事実である。

註

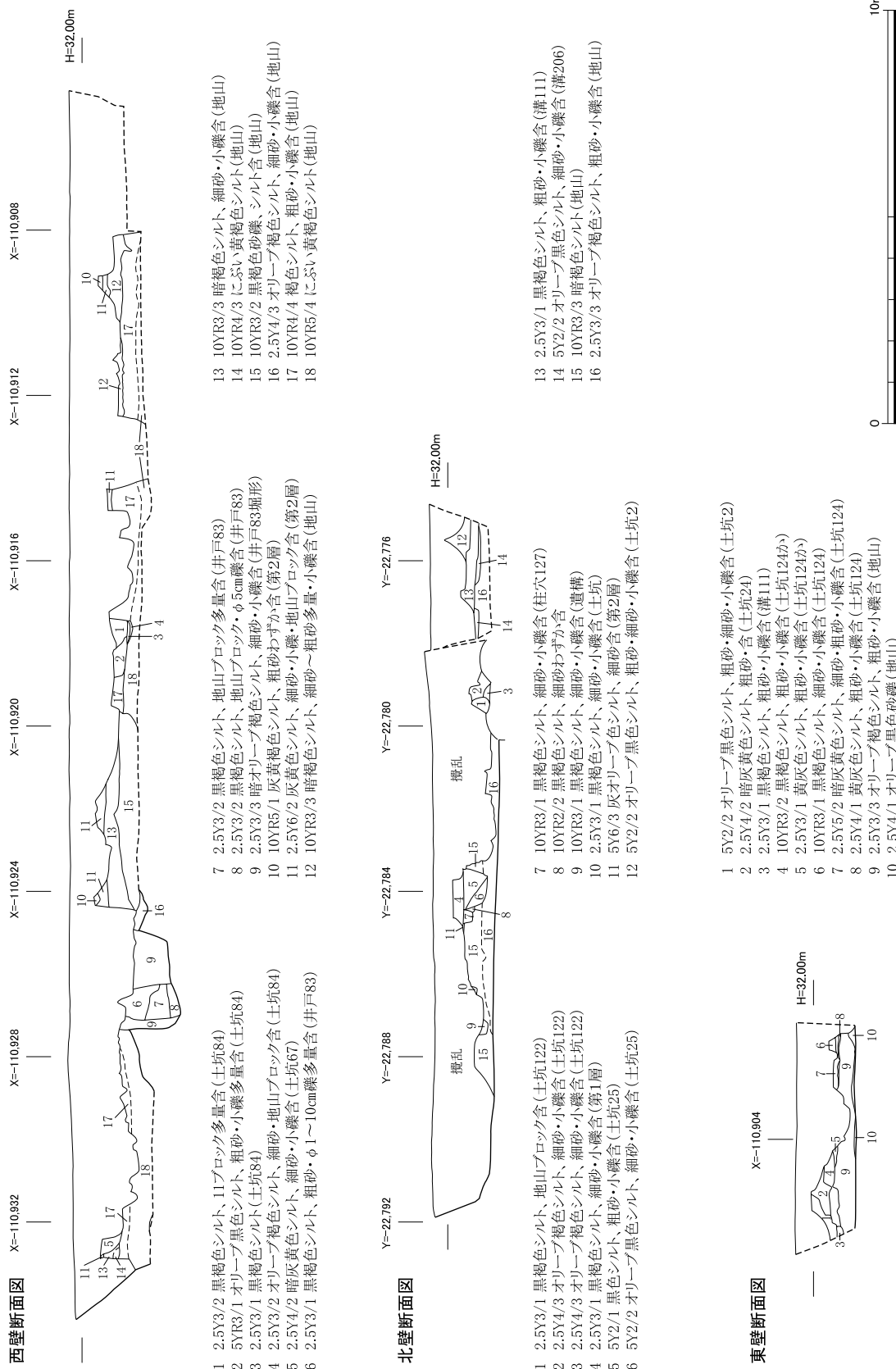
- 1) 『平安京左京五条二坊十六町 京都市下京区傘鉦町』京都文化博物館調査研究報告 第六輯 京都文化博物館 平成3年
- 2) 津々池惣一・高橋 潔・能芝 勉『平安京左京五条一坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

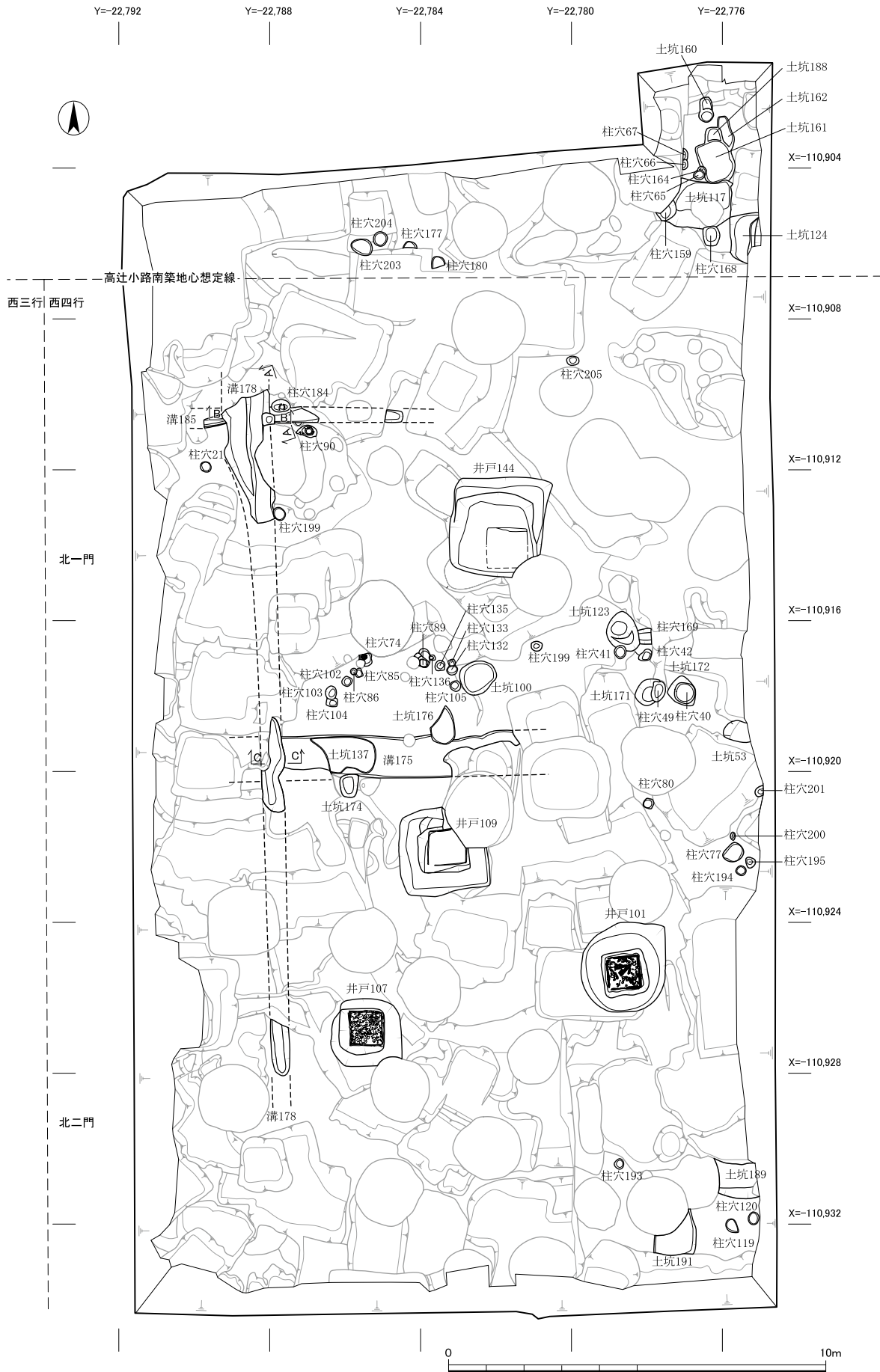
750頃		840頃		930頃		1010頃		1080～90頃		1180頃		1270頃		1360頃		1440頃		1500頃		1580～90頃		1660頃		1740年代頃		1820年代頃			
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV																
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 4) 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年
- 5) 平尾政幸・山口 真『平安京左京四条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6) 丸川義広・東 洋一・田中利律子・南出俊彦・加納敬一『平安京左京三条二坊十町(堀川院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-17 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年

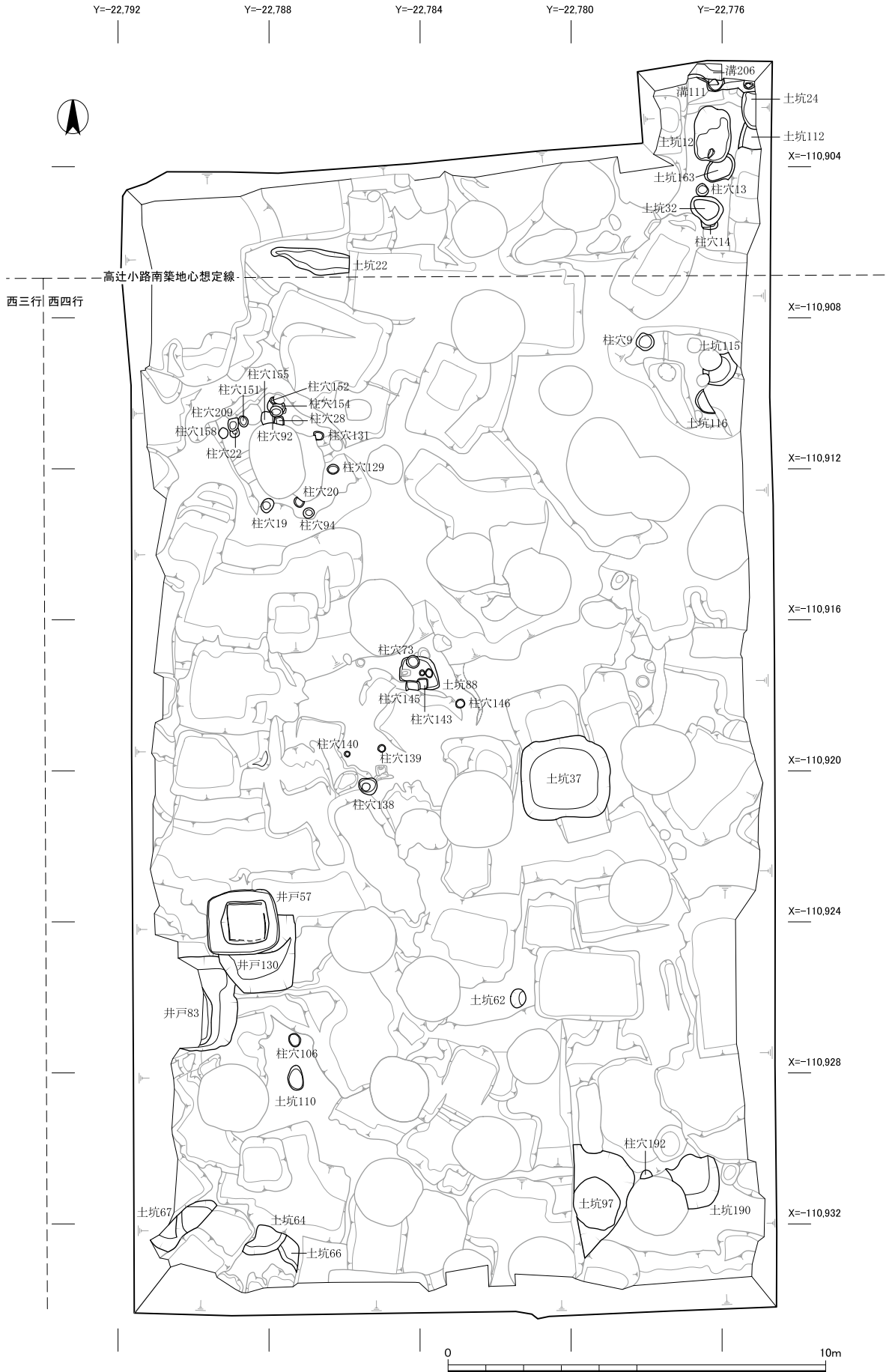
圖 版

調査区断面図 (1 : 150)

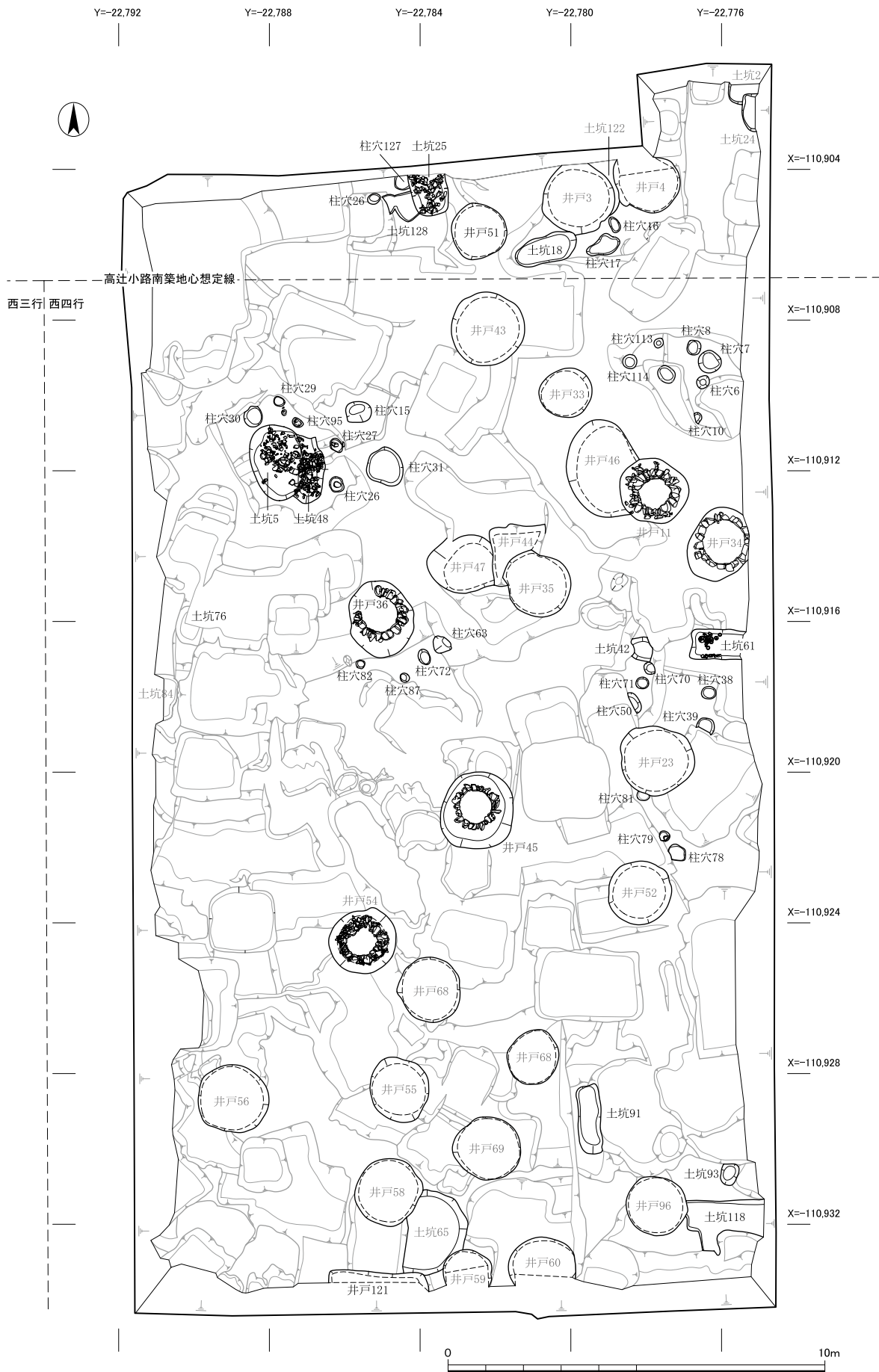




第3面平面図 (1 : 150)



第2面平面図 (1 : 150)



第1面平面図 (1 : 150)



1 第3面 調査区全景（北から）



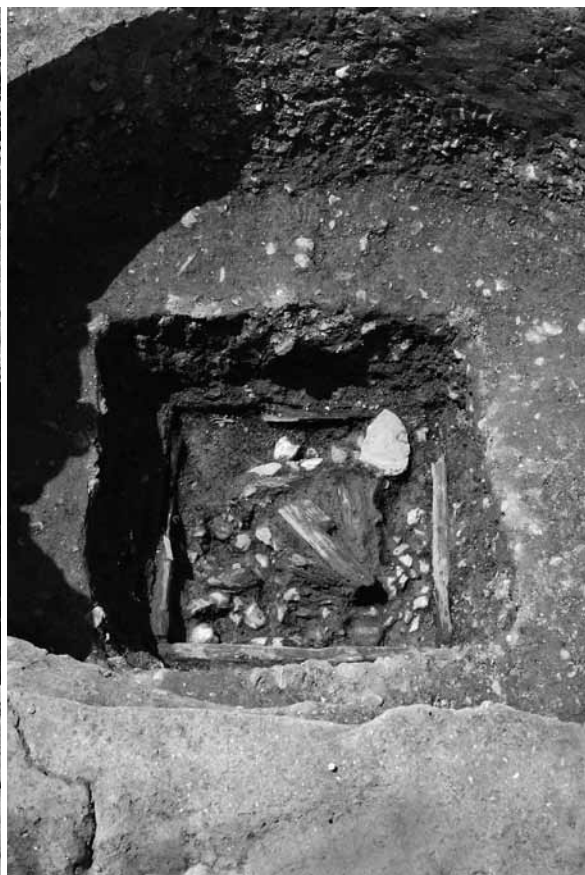
2 第3面 調査区北東部近景（北から）



3 第3面 溝185・178（北から）



1 第3面 井戸107 (西から)



2 第3面 井戸144 (東から)



3 第3面 井戸109 (北から)



4 第3面 柱穴74 (北西から)



1 第2面 調査区全景（北から）



2 第2面 調査区北東部近景（北から）



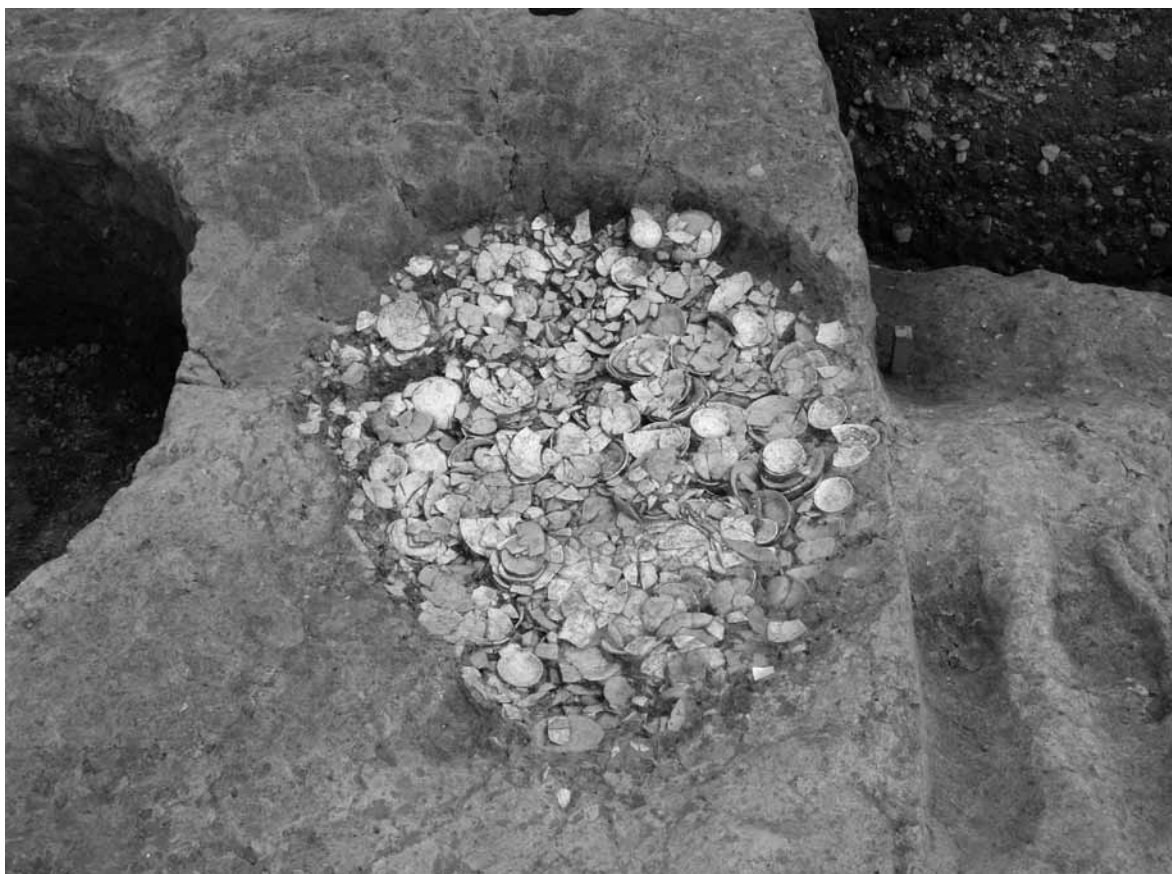
3 第2面 溝206（南西から）



1 第2面 井戸57 (北から)



2 第2面 土坑97断面 (北西から)



3 第2面 土坑97土器出土状況 (北から)



1 第1面 調査区全景（北から）



2 第1面 井戸36（北から）



3 第1面 柱穴63（北東から）



1 第1面 土坑61 (西から)



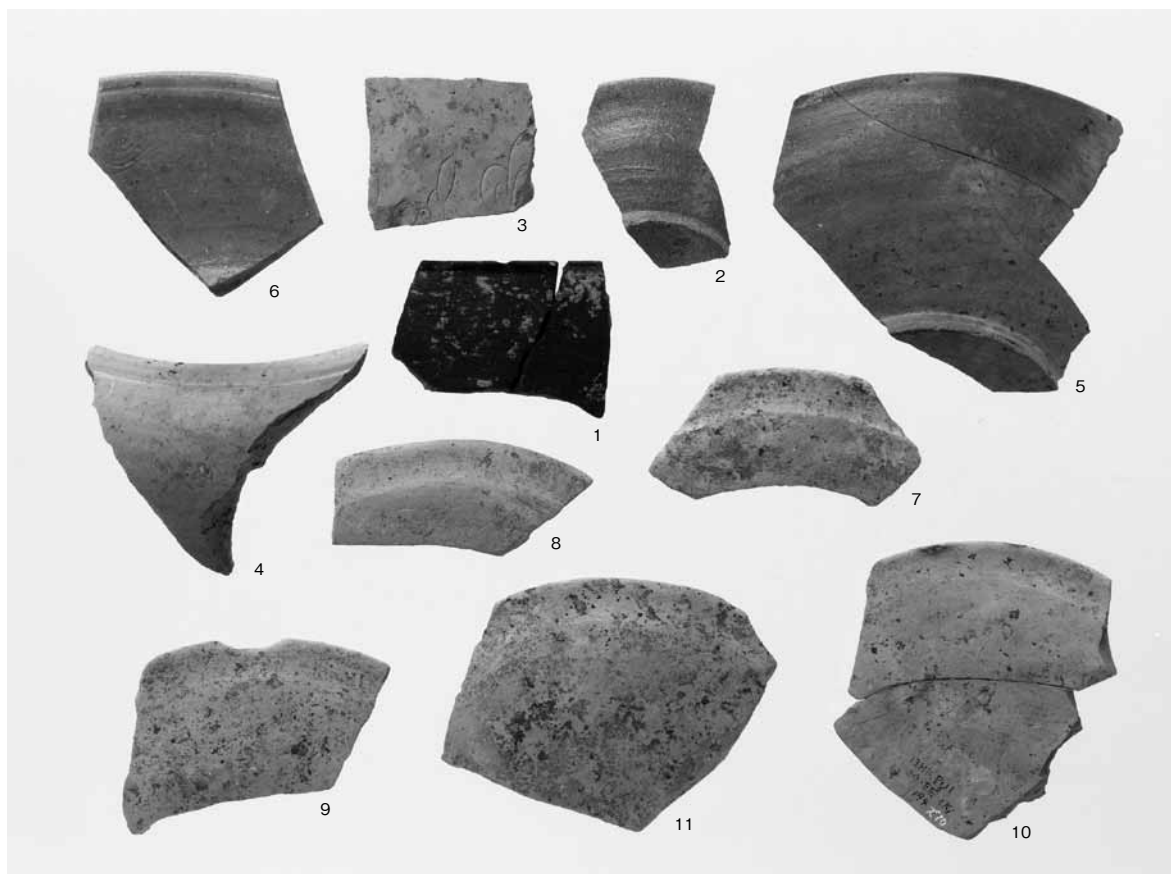
2 第1面 土坑25 (南から)



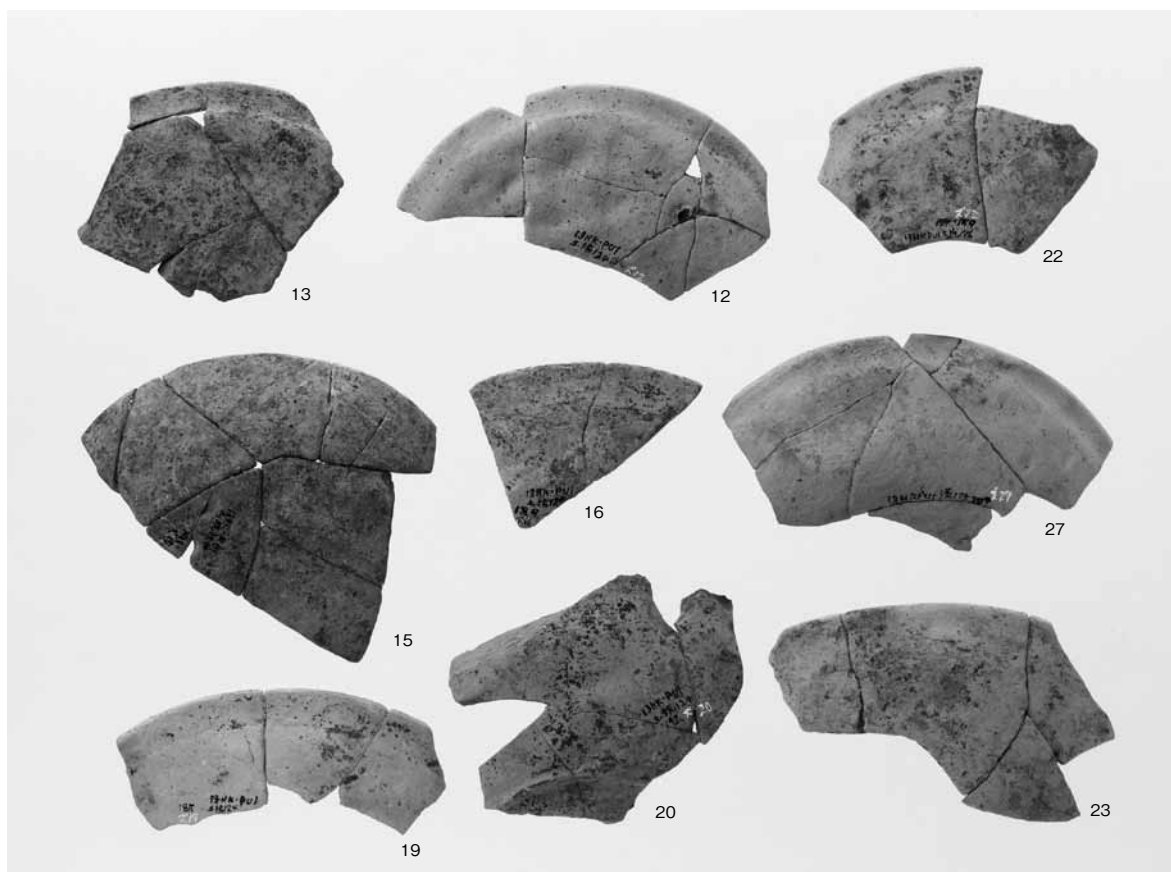
3 第1面 土坑5 遺物出土状況 (北から)



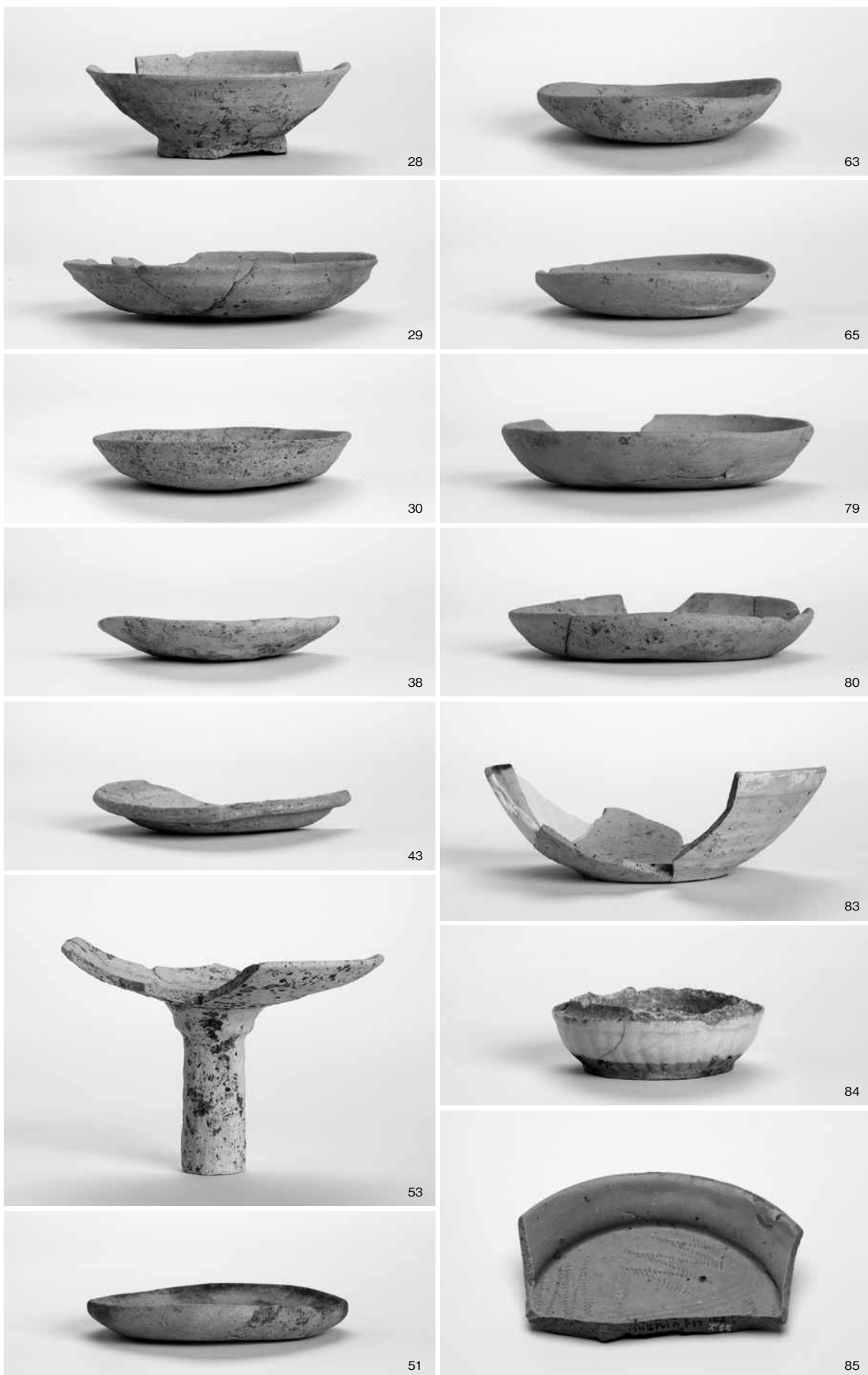
4 第1面 土坑48上面 (北から)



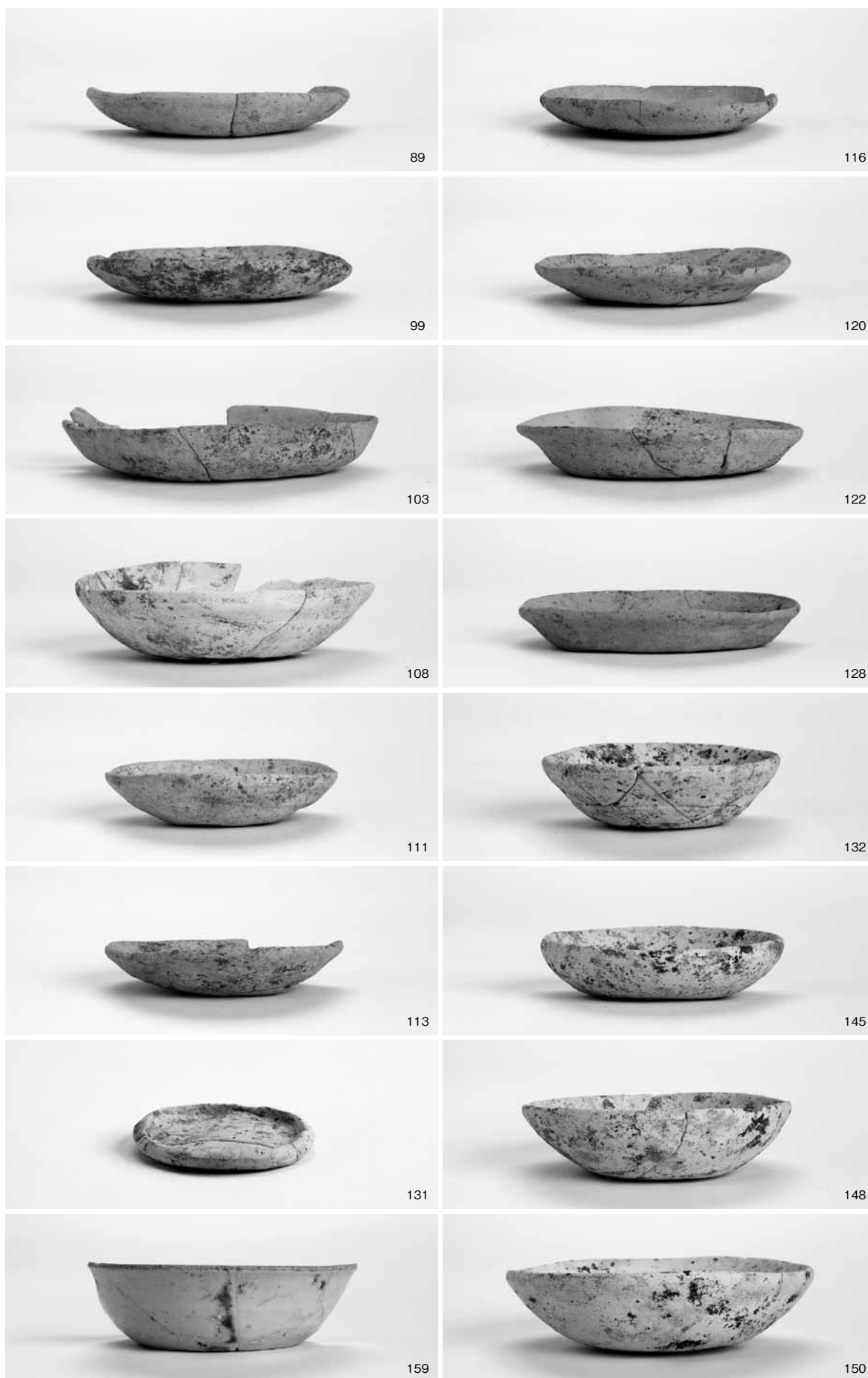
1 整地層、他遺構出土土器



2 土坑124・176、溝175出土土器



柱穴184・74、井戸107・101・57、土坑117出土土器



溝206・111、土坑67・62・97出土土器



土坑61・25・48・5、井戸36、柱穴63出土土器



土坑 5 出土土器、各遺構出土軒瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうにぼうよんちょうあと							
書名	平安京左京五条二坊四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-10							
編著者名	辻 裕司・伊藤 潔							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 たかつじどおりいのくまにしいる 高辻通猪熊西入 じゅうもんじちやう ばん 十文字町665番 ほか 他	26100	1	35度 00分 00秒	135度 45分 01秒	2013年6月 24日～2013 年9月13日	約555m ²	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安時代	井戸、土坑、柱穴	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、石製品、金属製品		平安京跡の条坊路を検出した。		
		鎌倉時代	高辻小路南溝・区画施設、井戸、土坑、柱穴	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、石製品、金属製品				
		室町時代	井戸、土坑、柱穴	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、石製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-10

平安京左京五条二坊四町跡

発行日 2014年1月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961